

■ 解 説

TOEIC[®]で満点を取る方法岩 本 直 樹[※]

目 次

I.	はじめに	83
II.	TOEIC とは？	84
III.	TOEIC の問題形式	85
IV.	TOEIC の利用法	86
V.	TOEIC スコアの意味	87
VI.	TOEIC スコア 990 点の世界	88
VII.	TOEIC の問題形式の分析と短期的対策	90
VIII.	私の TOEIC 受験体験	93
IX.	TOEIC を評価する	95
	(1) 概評	
	(2) レベル	
	(3) 形式	
	(4) 限界 1 : 書くことと話すことの試験の欠如	
	(5) 限界 2 : 色々なレベルの能力を測る	
	(6) 限界 3 : 文化的背景の分離	
	(7) 限界 4 : 統計学的要素	
	(8) TOEIC 範囲外の高度なコミュニケーション能力	
X.	英語の勉強法 (日本編 ー1977)	101
	(1) 読む	
	(2) 書く	
	(3) 聞く	
	(4) 話す	
XI.	英語の勉強法 (アメリカ編 1977ー2000)	103
	(1) 読む	
	(2) 書く	
	(3) 聞く	

※ 教授 工学部

e-mail address: niw@eng.kagawa-u.ac.jp

(4) 話す	
XII. 辞書, Style Manuals, etc.	110
(1) 辞書の話	
(2) Style Manuals	
(3) 語源の話	
XIII. 英語と日本語	113
(1) なぜ英語なのか?	
(2) 和製英語, 擬似英語と誤った英語	
(3) アルファベットの略記 (Acronyms)	
(4) 日本語で使われる英語の動詞と名詞	
(5) 日本式発音	
(6) 意味の変化	
(7) 単数と複数	
(8) あまり意味のない月並みな表現	
(9) あいまいな表現	
(10) 文字—アルファベットと漢字	
XIV. あとがき	123
XV. 付録: TOEIC 得点の有意な変化——命題 1—4 の証明	124
XVI. 参考文献	125

I. はじめに

三年前日本国香川大学へ赴任してから TOEIC という英語の試験のことを良く耳にした。どういう試験か良く分からないまま 2002 年 1 月に初めて TOEIC を受けてみた。Listening Part, Reading Part とも特に分からなかった問題はなくひよっとしたらと思っていたら結果は 495 点 + 495 点 = 990 点の満点であった。これを機会にこの TOEIC とはいったい何かと調べて見た。英語の学習方法についても何が良かったのだろうかと考えた。以下はその結果としてできた反省文である。

前半 (II—IX ; 本文の約 36 %) では TOEIC 運営委員会の資料, TOEIC 公式 website (<http://www.toeic.or.jp>; <http://www.toeic.com>) にある文献 [1—4], TOEIC 受験体験記, 対策問題集の類 [5—15] に載っているような一般的な事柄の解説, 私自身の受験体験にもとづく TOEIC 問題の分析・評価を行う。一部 TOEIC 運営委員会へ電話で照会・確認した事項も含まれる。TOEIC について知りたい, TOEIC を受けるので短期的対策を知りたいという方はこの部分を読むことを勧める。

後半 (X—XII ; 本文の約 27 %) ではまず具体的な英語の勉強法, さらに, それらに関連して言語を読む, 書く, 聞く, 話すという動作についてどういう作業が行われているかということについても (多分, 言語学でよく知られていることだと思うが) 経験的に述べ, 辞書, Style Manual について解説する。この部分は TOEIC 対策に限らない, つまり付け焼刃的でない長期間にわたる個人的英語訓練法が書かれている。どうやって勉強すれば英語が使えるようになるか知りたい方に勧める。

次に (XIII ; 本文の約 20 %) 英語と日本語の比較として, 英語から見た日本語, 日本語にいかにか英語の単語が取り入れられているかといったことについて記す。この部分は日本語に興味のある方向けである。この章では予告なしでどんどん脱線する事を警告しておく。

最後に TOEIC 公式 website にある文献, 本文で引用した TOEIC 高得点 (900 点以上) 向け関係文献に簡単な解説をつけたものと辞書類とを参考文献として載せておく。この TOEIC 関係文献は本文で引用したので挙げてはいるだけで, 本文で推薦しているものを除いて必ずしも一読を勧めているものではないということを断っておく。

ここに含まれるいわば “TOEIC 対策講座” 的なものをあえて書く理由であるが, “具体的な受験技術” を示すことでこの試験の性格, 限界等が良く分かると考えたからである。無論これを参考にして満点を取る人が続出してくればそれに越したことはない。外国語課目としての英語は教養教育の中でも教官数, 受講者数, 時間数の上で重要な位置を占める。それに関連の深い英語の試験ということでこの「教養教育研究」に投稿することにした。

私の専門は物理学であるが文理融合という香川大学工学部の創立理念に基づき, 材料創造工学科 2 年生向けに教養教育課目の英語の授業 (T-VI-4, 学生数約 60 人: 必修) を担当して 3 年経った。香川大学へ来るまでずっと英語で授業をやっていたこともあり, 英語を使うことに不自由はあまり感じなかった。しかし, 新たまって英語の授業を担当するようになると言われたとき最初正直のところ戸惑った。日本語を使いこなせることと日本語を教えることができることとは違うのと同じである。従って私自身英文科, 英語教育とは全く関係ないのみならず英語教育歴は皆無に近

いことを最初にお断りしておく。逆に自分の専門でないため英語は私にとっては教養（ドイツ語の Bildung）の一部である。これが「教養教育研究」に投稿する第二の理由である。

これからの日本の大学では「評価」ということが重要になってくる。その際評価の基準が求められる。勿論完璧な評価基準などありえないが、TOEIC を含めた英語検定試験を英語教育に携わる教官あるいは留学生関係などの国際的業務にかかわる事務官の任用、評価基準の一つとして使うことが考えられる。一方 Faculty Development という組織の側からの教官の能力開発が日本の大学でも始まりつつある。本学でも全教官を半強制的に 1 日参加させる研修会が開かれてきた。1 日の参加で目に見える効果があるなら無論やるべきであるが、本来能力開発は教官個人個人が自発的に短期・長期の目標を立て自覚を持ってやるべきことであろう。TOEIC を含めた英語検定試験を教官の教育能力開発のための一つの手段として、受験を奨励するなり財政的に支援するなどすれば Faculty Development の効果的、多様の展開に役立つように思われる。TOEIC を「評価」、Faculty Development という視点からも見るということが「教養教育研究」に投稿する第三の理由である。

II. TOEIC とは？

TOEIC[®](Test of English for International Communication[™]) は英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテストである。1979 年日本の（当時の）通商産業省の要請により米国のテスト開発私的非営利団体¹ Educational Testing Service[®] (ETS[®] : 1947 年設立) によって開発された。[1] (TOEIC は ETS の登録商標である。) ETS は TOEFL[®] (Test of English as a Foreign Language[™]: 米国やカナダの大学、大学院へ入学志望の外国人に課する英語能力試験), SAT[®] [Scholastic (Aptitude) Assessment Tests[™]: 1926 年以来ある全米大学入学用共通学力試験], GRE[®] (Graduate Record Examination[®] : 全米大学院入学用共通学力試験) 等各種の資格試験、国家試験、適正試験などを開発作成してきている。1996 年より ETS の子会社（営利団体）The Chauncey Group International[®] が TOEIC プログラムの制作並びに世界における実施・運営を行っている。[Henry Chauncey (1905—2002) は ETS の創始者で 1970 年まで初代社長を務めた。] 現在 TOEIC は世界 60 ヶ国で実施され、世界の受験者数は 2000 年（1 月—12 月）に 200 万人を上回った。ただし受験者は日本と韓国が大半を占める。1997—1998 年 2 年間の受験者総数 140 万人の内訳は日本 63%, 韓国 29%, その他のアジア諸国 3%, ヨーロッパ 4% 等となっている。[3] 同じ統計で、受験年齢層は 25 歳未満 29%, 25—34 歳 51%, 35—45 歳 15%, 46 歳以上 4%; 性別では男 77%, 女 23%; 93% が職を持

1 ETS の website (<http://www.ets.org>) によれば “Educational Testing Service is the world largest private educational measurement organization ...” と書かれているので明らかに私的機関であり、すぐその後政府とは関係ないと断っている。これを日本の TOEIC 運営委員会の TOEIC 受験申込書添付パンフレットに書かれているように “米国のテスト開発公共機関” と呼ぶと語弊があり誤解を招く。同様に文献 [5] (10 ページ) では “アメリカの公共テスト開発機関” とあり、“公共” が何を修飾するかによるが、“公共テスト” とすると妙な言葉になるし “公共機関” という誤解を招く。この（悪く言えば）歪曲は公のものの方が権威があるという日本的発想に起因しているようである。

ち5%が学生；学歴は82%が大学在学中か大学卒以上（日本を除く）；48%が科学技術関係の専門職についていて68%が非管理職であった。英語を週に2回以上使うのは29%；英語圏の国で6ヶ月以上滞在した経験を持つものは9%といった具合である。

日本では財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会によって実施される。2003年には年8回（1, 3, 5, 6, 7, 9, 10, 11月）あり誰でも受けられる公開テストと呼ばれるもの〔受験料は消費税5%込みで¥6,615。試験結果はOfficial Score Certificate（公式認定証）という形でおよそ一ヶ月後に郵送されてくる。〕と企業、団体、学校などの組織内部で実施される団体特別受験制度（Institutional Program：これには公式認定証は発行されない。）とがある。公開テストの受験地は増えつづけていて2003年1月時点で71都市ある。ただこの71都市全てで年間8回とも受験できるわけではなく、時期によって受験可能都市数は10から69の間にある。日本での受験者数は公開テストが始まった1979年以来緩やかな2次曲線を描いて上昇を続け、両者併せて1988年度20万人、1992年度40万人、1996年度60万人をそれぞれ超え、最近では2000年度（2000年4月—2001年3月）109万人、2001年度128万人となっている。公開テストと団体特別受験の年間受験者数の比率は1980年代半ばから1990年代の半ばまで団体特別受験者数が大半であったが最近では半々くらいになってきている。また延べ受験者数を見ると公開テストでは1979年の第1回—2002年5月の間300万人、団体特別受験では3,128団体566万人である。

TOEIC 関連の書籍は多い。http://www.amazon.co.jp で調べると2003年4月中旬の時点でTOEICのkeywordのもとに和書で1,189件、洋書で58件載っていた。ただしこの1,189件の和書には（最初の50件を調べて13件つまり26%の割合で）TOEFL 関連のものも混じっている。² いずれにせよTOEICについて書かれた本はたくさんある。

Ⅲ. TOEIC の問題形式

Section I: Listening 100問（45分）とSection II: Reading 100問（75分）が連続して合計2時間休憩なしで行われる。これらは以下の7つの部分に分かれている。なお指図、会話などの音声による問題、印刷された問題文等全て英語である。

Section I: Listening 100問（45分） 音声・印刷物併用

Part I 写真描写問題（Photographs） 四肢択一 20問

各々1枚の印刷された写真について音声で流れる説明の中から最も的確にその様子を説明している選択肢を選ぶ。

Part II 応答問題（Question-Response） 三肢択一 30問

音声で流れる質問に対して音声で流れる応答の中から最もふさわしい選択肢を選ぶ。

Part III 会話問題（Short Conversations） 四肢択一 30問

2 逆に、TOEFLのkeywordでは和書1,054件、洋書377件あり、この両者にはTOEIC 関連のものも混じっている。このwebsiteは検索プログラムにbugがあるのか経営方針なのか書籍の分類に関してかなり雑である。

音声で流れる2人の会話を聞いてから印刷された設問と答えの選択肢を読み会話の内容に合致している選択肢を選ぶ。

Part IV 説明文問題 (Short Talks) 四肢択一 20問

音声で流れる短い文章を聞いてから印刷された2つまたは3つの設問と答えの選択肢を読みその内容に合致している選択肢を選ぶ。

Section II: Reading 100問 (75分) 問題文, 選択肢ともすべて印刷されている。

Part V 文法・語彙問題 (Incomplete Sentences) 四肢択一 40問

選択肢の中から最も適切な単語や句を選び文章を完成させる穴埋め問題。

Part VI 誤文訂正問題 (Error Recognition) 四肢択一 20問

下線が引かれた4つの単語や句の中から文法的に間違っているものを選ぶ。

Part VII 読解問題 (Reading Comprehension) 四肢択一 40問

手紙, 新聞記事, 広告等を読み設問に答える。

IV. TOEIC の利用法

TOEICは1999年3月に(当時の)文部省より大学における単位認定の要件の一つとして認められ, 推薦入試の条件にも採用されている。さらに2002年7月に文部科学省が発表した「英語が使える日本人のための戦略構想」によれば2006年度の大学入試センター試験より英語リスニングテストを導入し, 各大学の入学試験でTOEFL, TOEICなどを活用するとある。また初等, 中等教育においても2003年度から5ヵ年間全国の公立中学校, 高校の現職英語教員6万人に能力別の研修を実施し英検準1級, TOEFL550点, TOEIC730点以上を目標とする。さらにTOEICなどの点数を採用条件や評価項目に使うよう教育委員会に求めるとなっている。

一方企業では社員の採用, 海外派遣, 昇進, 昇給の条件などとして利用されてきている。第11回TOEIC活用実態報告(2001年7月発行: 2096社へのアンケート調査で763社より有効回答)によるとTOEICスコアの利用方法(複数回答)として自己啓発(421社: 55.2%), 海外出張・駐在・留学基準(319社: 41.8%), 英語研修(312社: 40.9%), 新入社員のレベルチェック(306社: 40.1%), 人事異動基準(126社: 16.5%)等となっている。さらに“TOEICスコアを社員採用時に考慮するか”という問いに対して“考慮している”(428社: 56.1%), “考慮していない, しかし将来は考慮したい”(192社: 25.2%)と回答し; “TOEICスコアを昇進・昇格の要件にしているか”に対して“要件としている”(104社: 13.6%), “要件としていない, しかし将来は要件にしたい”(306社: 40.1%)等と回答している。別の資料で企業別に具体例をあげれば

日本IBM	昇進条件. 課長相当職 /600点. 次長相当職 /730点
丸紅	昇進条件. 等級のランクアップ /600点
トヨタ自動車	昇進条件. 係長 /600点
松下電器	昇進条件. 主任 /450点. 海外関連業務従事者 /650点
沖電気工業	報奨金. 730点以上 /2万円, 865点以上 /5万円

(International Conversation Center HP による)

といった使われ方をしている。

V. TOEIC スコアの意味

試験結果は Section I: Listening Test (5 点—495 点) と Section II: Reading Test (5 点—495 点) の得点が 5 点刻みで別々に出されその合計点 (10 点—990 点) と統計データが約 1 ヶ月後に郵送されてくる。TOEIC で過去に出た問題の一部は公表されているが [14,15], 各回ごとの問題は公表されていない。従って受験後どの問題が正解であってどの問題を間違ったかという事は確かめられない。Listening, Reading 2 種類の Section ごとの点数しかわからない。Section I, II 各々最高点は単純に計算して各問 5 点 \times 100 問 = 500 点になるはずであるが実際には最高点は 495 点にとどめられている。最低が 0 点でなく最高が 500 点でないのは誤差が 1 問分程度あると見なすからであろう。実際の統計的誤差はもっと大きい。³

毎回の公開試験での採点の際、難易度を考慮して素点が補正される。まず毎回受験する集団は異なるので過去に出たことのある問題をいくつか混ぜておき、集団のレベルを評価する。そして、今度はその集団の中での各受験者の出来具合を見て、同じレベルの英語力の受験者がどの回の試験を受けたとしてもほぼ同じ点数になるように素点から認定証に記入されるスコアへと変換する。従って試験での正答数と得点とは必ずしも比例しない。ランダムに回答すれば確率的に Listening で $20/4+30/3+30/3+20/4 = 30$ 問, Reading で $40/4+20/4+40/4 = 25$ 問, 合計 55 問正解で 275 点取れるはずである。例えば全て最初の選択肢 A ばかりを選んだ場合。しかしそのような方法では結果が 275 点とは出ないアルゴリズムが採点方法に組み入れられていると TOEIC 公式 website には書かれている。難易度補正後に最高点が今までで最低だった Version は 1980 年 5 月実施の Reading Section に使われた Form3CIC1 で最高点は 450 点であった。[4] (I-1 ページ) TOEIC スコアに対して次のようなコミュニケーション能力レベル評価のガイドラインが与えられている。

860—990 点 レベル A: Non-Native として十分なコミュニケーションができる。自己の経験の範囲内では、専門外の分野の話題に対しても十分な理解とふさわしい表現ができる。Native Speaker の域には一歩隔たりがあるとはいえ、語彙・文法・構文のいずれをも正確に把握し、流暢に駆使する力を持っている。

730—860 点 レベル B: どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている。通常会話は完全に理解でき、応答力もはやい。話題が特定分野にわたっても、対応できる力を持っている。業務上も大きな支障はない。正確さと流暢さに個人差があり、文法・構文上の誤りが見受けられる場合もあるが、意思疎通を妨げるほどではない。

3 IX. TOEIC を評価する (7) 限界 4: 統計学的要素を参照。

470—730点 レベルC： 日常生活のニーズを充足し，限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。通常会話であれば，要点を理解し，応答にも支障はない。複雑な場面における的確な対応や意思疎通になると巧拙の差が見られる。基本的な文法・構文は身につけており，表現力の不足はあっても，ともかく自己の意思を伝える語彙を備えている。

220—470点 レベルD： 通常会話で最低限のコミュニケーションができる。ゆっくり話してもらるか，繰り返しや言い換えをしてもらえば，簡単な会話は理解できる。身近な話題であれば応答も可能である。語彙・文法・構文ともに不十分なところは多いが，相手が Non-Native に特別な配慮をしてくれる場合には，意思疎通をはかることができる。

10—220点 レベルE： コミュニケーションができるまでに至っていない。単純な会話をゆっくり話してもらっても，部分的にしか理解できない。断片的に単語を並べる程度で，実質的な意思疎通の役には立たない。

もう1つの評価の目安として“英語学習使用目的別 TOEIC スコア (例)”として以下が挙げられている。[5]

- 950点 同時通訳者になりたい
- 900点 逐次通訳者になりたい
- 860点 翻訳者として独立したい
- 730点 一人で海外滞在できる英語力をつけたい
- 600点 一人で海外出張できる英語力をつけたい
- 500点 一人で海外旅行できる英語力をつけたい

因みに2000年度の受験者の平均点は公開テストで Listening 309点，Reading 252点，合計561点，団体特別受験制度で Listening 245点，Reading 200点，合計445点であった。団体特別受験制度での大学生の平均は Listening 237点，Reading 191点，合計428点であった。

VI. TOEIC スコア 990 点の世界

どのくらいの数の受験者が満点を取っているのでしょうか？私の受けた第89回(2002年1月：受験者数90,507人)では990点の percentile rank つまり990点未満に総受験者の何パーセントがいるかという数字は99.9であった。つまり総受験者の0.1%(91人)が990点を取ったことになる。この数字は四捨五入されているためもっと正確には990点獲得者数は全体の0.05%以上0.15%未満であると解釈でき46人と135人の間になる。ただし毎回満点990点が出るわけではない。例えば最高点は第87回(2001年10月：受験者数38,299人)985点，第88回(2001年11月：受験者数67,403人)980点，第93回(2002年9月：受験者数83,716人)980点，第94回(2002年10月：受験者数28,025人)985点といった具合である。

まず“900点以上のスコアを取得することは並大抵のことではない”[11]と言われる。そして900点以上のスコア取得者は“実社会では瞬時のうちに聞き取り書類に目を通してきばきと処理していく”ことが期待される。[11] “超上級者とは「答えがわかる」レベルから「与えられる問題と選択肢全てが分かる」に限りなく近づくレベル”である。[11] これには確かに思い当たる節がある。この試験では問題数200に対して全部で選択肢が770ある。この770全てに対して正誤の判断ができるレベルだと言ってよい。それにとどまらず、Readingの穴埋め問題は選択肢がなくてもできる。誤文訂正問題では単に間違っている選択肢を選べるだけでなく訂正ができる。読解問題では問題文のような文章そのものを作文できる等等。

“900点というのは一般の人から見れば尋常な点数ではありません。”[10] “翻訳や通訳、そして講師の質が高い英会話学校での講師の職など、高度な英語を必要とされるプロフェッショナルになるためには、860点よりも実質900点を最低ラインと考えた方が無難です。”[10] “TOEIC900点というのは、読み、書き、聞く、話すの全ての場面で、意味が取れるかどうかや、相手に理解してもらえるかどうかを心配するレベルではありません。いかにナチュラルさを認識しながら英語が使えるかが問題となります。つまり、文法的に正しいだけでは不足なのです。”[10] 具体的に990点とはどういうレベルであろうか？上記の860点—990点のレベルAに関して“Native Speakerの域には一步隔たりがあるとはいえ”というちょっと気になる表現があるが、この点数の範囲に当てはまる一般的な評価と考えたい。同じTOEIC公式websiteには“上は990点というNative Speakerのレベル”という記述が見られる。また“仮に低い点数を取ったとしても悲観する必要はありませんし、全員が必ず990点を目指す必要もありません。”とある。990点取得者の書いた本がいくつかあるものの、その中に1回目の受験で満点という著者は今のところいないようである。“初戦で勝利する(満点を取る)ことは不可能です。よほどの天才でないかぎり。”[9]とある。天才という言葉はもっと慎重に使いたい。

選択式回答方法のため、実際に990点以下の実力でも990点は取れる。まず1問あたりの選択肢の数は問題数の重みをつけて平均すると3.7になる。まず実力だけで素点1000点、995点、990点取れば全て990点となる。次に実力だけで985点取ればあと分からない3問のうちランダムに回答して最低1問正答できる確率は61.1%となりこの確率で990点取れる。同じく実力だけで980点取れば、分からない4問のうち最低2問正答できる確率は29.6%である。以下同様にして975点(12.6%)、970点(4.9%)、965点(1.8%)、960点(0.16%)などとなる。従って990点取るためには200問のうち厳密に2問(1%)以内の誤答しか許されないという訳ではなく、分からない問題が3—4問(1.5%—2%)程度までなら確率的に満点になる可能性が充分にあることがわかる。勿論この計算に先に述べた点数補正のアルゴリズムは考慮していない。実際にはこの点数補正のためある回の公開テスト問題が難しかった場合、99%以上の正答でなくても得点990点が与えられることがあり、逆にやさしかった場合全問正答でも得点は990点にならないことがあるようである。[4] この他に英語の実力を有限の数の問題で測ろうとすることに起因する統計的揺らぎがかなりある。⁴

最高点が1,000点ではなく1%引いて990点になっているのは実はありがたい。今後たとえ

4 IX. TOEICを評価する(7)限界4:統計学的要素を参照。

何らかの英語の誤りを指摘されてもいやいや弘法も木から落ちる、猿も筆の誤りでその1%だと言えるからである。

VII. TOEIC の問題形式の分析と短期的対策

ここで短期的対策として TOEIC 受験 2 - 3 ヶ月前から受験直前までに練習しておくべきことを書く。一番大切なのは問題形式に慣れることによりケアレスミスとパニックを避けることであり、持っている実力を発揮することである。これだけでも得点は目に見えてあがるはずである。具体的には *TOEIC Friends* という CD 付の隔月刊誌 [12] や実際の問題形式をとった適当な問題集が役に立つと思われる。ただし *TOEIC Friends* の読解問題の中には正しいとされる選択肢に合致する内容がどう読んでも書かれていないものもあった。さらに読解問題の手紙文では標準的形式にのっとっていないものも見受けられた。これらの点を除けば練習問題としては役に立つ。その他の問題集では“…点完全攻略”、“…点完全突破”、“…点突破必須英単語”、“…問題と徹底対策”、“攻略…点”と言った類が書店にあふれている。短期的対策の後は実力そのものを上げる長期的対策になるがこれには王道はなく、安直な方法もない。数年、十数年、あるいは何十年単位の話になる。私の自己流の例として X, XI 英語勉強法を参考にされたい。

では実力をつけることにより TOEIC のスコアを上げるには具体的にどのくらい勉強すればいいのであろうか？ TOEIC User Guide [1] によると 100 時間の英語の訓練を目安としている。毎日 1 時間でおよそ 3 ヶ月あまり。一般的に言ってこれ以下の準備で再受験することは勧めないと書いてある。[1]

試験時間は 120 分である。最初に Listening Test 45 分がありその後 75 分を使って Reading Test を受ける。勿論、最初 45 分間の Listening Test の間に (Listening Test の一部または全部を受けないのなら) Reading Test 問題を見たり回答したりしても良い。同じく Reading Test を受けている次の 75 分間に Listening Test の答えを直したりすることもできる。その際、最初 45 分間に聞いたテープの記憶に従ってということであっては勿論その後テープは流れない。

まず Listening Section で注意すべきことは問題文、会話、選択肢などが 1 回しか読み上げられないということである。本質的な部分を聞き逃してしまうと正しく回答できないので 45 分間息が抜けない。現実の会話であれば聞き返すことができるので、その点現実よりも厳しいところがある。さらに問題冊子にあらかじめ設問が印刷されていないので前もって読めない (つまり読み上げられるまで何が出てくるか分からない) Part I と Part II では、選択肢や問題文を 1 回聞いただけで正確に内容を把握する力が試される。問題文が読み上げられ、次に全ての選択肢が出揃った後“考える”時間は 3 秒とか 5 秒とかしか与えられていない。これは短いように見える。しかしここでは正答の必ずはいった選択肢が与えられているので単にそれを選べばよいのに対し、実際の会話では答えを自分で作文しなければいけない。さらに会話の返答に無言の時間が 5 秒ずつあるとしたら正常な会話にはならないであろう。

Part I 問題冊子のシールを切っても良いという指図の後直ちに Listening Test が始まる。最初は Part I 写真描写問題である。まず例題の写真を見て回答方法の説明がある。そしていよいよ第 1 問が始まる。ここで Listening Test 開始から実際第 1 問が始まるまでにおよそ 120 秒ある。

この時間は非常に貴重である。例題を使った説明は毎回同じなので聞かなくて良い。この部分はスコアと関係ない。この時間を有効に使うことで全部で20ある写真をできるだけ次々見ていきそれらの場面の状況を把握しておく。物が写っている場合それらは何か、それらの状態、配置等を良く見ておく。人が写っている場合、その人(達)は何をしているのか、あるいは何をこれからしようとしているのか、何を持っているのか等を良く見る。実際このような事柄が通常良く質問される。私の場合この間に最初の10の写真を見る時間があった。[このように時間を最大限有効に使うというのは、900点以上得点しようとする場合の常套手段である。例えば、問題集[2]のCDでは例題を省略している。“先読み”しないで回答する練習のためである。TOEIC受験技術はそこまで進んでいる。] 第1問から第20問までおよそ9分あまりで終わる。各問およそ27秒のペースである。写真を説明する文章が4つ読み上げられた後5-6秒の空白があって次の問題が始まる。従って全ての選択肢が出揃った後5-6秒で回答しなければならない。これら4つの選択肢は(1)正誤誤誤、(2)誤正誤誤、(3)誤誤正誤、(4)誤誤誤正のいずれかの組み合わせで出る。(以下の問題形式で四者択一の場合は同じことが言える。) (1)の順番の場合最初に正しい選択肢が出るので後の3つは間違っているということを確認しながら聞くことになる。一方(4)の順番であれば4つ目の選択肢が読み上げられるまで回答はできない。しかし誤誤誤と出れば4つ目が正でなければならないはずで、4つ目を聞くとき正のはずであると期待し、確認しながら聞くことになる。一つの可能な方法として正しい選択肢が出た段階でその問題を終え次の写真を見始めることが考えられる。この方法では早く進めるが正確さに欠ける。もし思い違いをして誤った選択肢を選んでしまった場合それを訂正できる可能性がない。もう一つの方法としては一応最後の選択肢まできちんと聞き、正誤の確認をすることが考えられる。私は後者の方法を採用した。いずれにせよ全ての選択肢を聞いた後で考え始めるのでは遅い。各選択肢が読み上げられるごとに正誤の判断が必要である。遅くとも全ての選択肢が読み上げられた時点で回答を終えるべきである。

Part II 応答問題： 問題文と3つの選択肢とも読み上げられ、問題用紙には何も印刷されていないのでここでは“先読み”をする必要がないし、できない。つまり相手のペースで試験が進行するということである。およそ10分間で30問ある。1問平均20秒である。最初の文章は例えば3秒と短い。その後例えば10秒かけて3つの選択肢が読み上げられる。単語の隅々まできちんと聞き取ることが要求される。例えば(自作問題)、“Why did he go to Paris?”に対して(a) Because he had some business to do. (b) Only the central part. (c) By train. のような選択肢が読み上げられる。(b)と(c)は最初の疑問文をそれぞれ”Where did he go in Paris?” “How did he go to Paris?”と聞き違えると正しい答えになってしまう。一つの単語を発音の良く似た別の単語と聞き違えると正答ができなくなる可能性のある問題である。因みに“Why”で訊く疑問文の正しい答えには明らかにそうだとわかる“Because ...”はまず使われないというのがTOEIC受験の常識である。もう一例(自作問題)、“Don't drive in this lane.”に対して(a) Oh! You're right. We're not turning. (b) It's OK. The rain is not that hard. (c) No, this lane is for passing. 最初の命令文と(a)とで二人が車の中にいて車が誤って左折か右折の車線にいたことが分かる。(c)では応答にならない。最初の文章を“Don't drive in this rain.”のように“l”と“r”とを聞き違えると全く意味が変わり、雨の中をドライブするなど止められて、いやこの雨はたいしたことはないという(b)が正しい答えになってしまう。

Part III 二人の会話問題： 30問がおよそ11分かけて行われる。1問あたり約22秒である。例えば11秒の会話が流れ、引き続いて8秒程度で問題用紙に印刷された4つの選択肢の中から正しいものを1つ選ぶと次の問題が始まるといった具合である。この問題にも“先読み”が有効になる。1つの問題の回答を終え次第、次の問題に行き、あらかじめ選択肢を読んでおくことにより、どういう状況かがまずつかめる。そして選択肢のどれかに相当する内容を探しながら会話を聞くことになる。

Part IV 説明文問題： 20問が10分弱で行われる。読み上げられる1つの問題文に対して2つの設問があるのでおよそ2問あたり1分弱のペースである。例えば問題文の読み上げが15—28秒あり、それに対して問題用紙に印刷された設問と4つの選択肢を見て1つ正答を選ぶ。この2つの設問に対する回答時間が32—27秒あって、次の問題にいくといった形になっている。この問題にも“先読み”が有効になる。

Reading Section： 45分間のListening Sectionが相手のペースで進行するのに対して次の75分間のReading Sectionでは回答速度と時間配分が自由にできる。75分を使い切って1回どおりやるか、速くやって“見直し”をするか最適化をする必要がある。分からない問題があれば何かをひとまず選び後で戻って来れば良い。選択肢を選ぶ場合最後まで見なくて正しいものが見つかった時点で次の問題に行ってもよい。Listening Sectionと違って“見直し”が可能だからである。ただし単純に計算して1問あたり平均45秒で答えていかなければならない。Part VとPart VIはそれほどかからないが、Part VIIの読解問題は問題文を読む時間が必要なので平均45秒以上かかるであろう。

Part V 文法・語彙の穴埋め問題 40問： 順番どおりやってよい。

Part VI 誤文訂正問題 20問： これも順番どおりやってよい。

Part VII 読解問題 40問： 一番時間を使うPartであろう。問題文を始めから終わりまで読んでから設問を読んでいたのでは間に合わない。問題文の全てが設問に関係あるわけではないからである。設問を先ず読み何が問われているかを知って答えを探すべく問題文を読むのが良い。つまり“逆読み”をやる。1つの問題文あたり設問は2—4問ある。

このように見てくると“先読み”とか“逆読み”とか単なる受験技術だという印象を与えるかも知れないが実はそうではない。実社会でもこのようなやり方はよく使われる。例えば研究資金申請のとき予算に関する規則を調べるものとしよう。研究資金申請書作成要領の予算の部分を始めから終わりまで熟読、味読する時間の余裕は現実にはなかなかない。従って目次をさらりと見た後見当をつけて拾い読みをすることとなる。ある場所で既に探している事柄について記述が終わっているようであれば逆に探していくこととなる。現実の会話の場合では大体何についての話になるかということはあらかじめ想像できるはずのものであるが、そのような場合でも大局的な状況をあらかじめつかんでおくとか会話の進行に従って状況の変化を素早くつかむこととかは大切なことである。

その他の対策としては、ある程度どうしようもないのが試験場、空調、音響設備、雑音等の影響である。幸い私の受けた時には問題にならなかったが試験場の大きさ、空調の状態、音響設備、残響の度合い、他の試験室との遮音、他の受験生による咳・くしゃみなどの雑音等はListening Testで非常に深刻な問題になりうる。一言を聞き漏らすと致命的になるタイプの問題が多くあ

るからである。運悪く由緒ある大学の古い校舎などが試験場になるとあきらめるしかないであろう。

送られてきた受験票についていた試験会場の地図の下に“TOEICテストでは、リスニングの間は外部からの騒音を防ぐ目的で教室のドア・窓を閉めさせていただきます。天候、季節によっては、環境の維持が難しい場合もありますので、調節のできる服装でお越してください。”と但し書きがあった。5月下旬、9月下旬は空調が中途半端な時期であるので、具体的には次のようなことが起こりうる。“リスニングのパートが苦しいですよ。5月の下旬…リスニングの試験が始まるとたちまち「外部の騒音を防止する」ということで窓は閉められてしまいます。…二酸化炭素の充満する中、頭もボーッとになってしまうのです。”[8]“…雨がしとしとと降る蒸し暑い日…9月の下旬…当然大学の教室にはクーラーなど入っていない。…窓ガラスは熱気と湿気で曇ってしまい、外の景色がまるで見えなくなる。教室のあちこちで小さな受験票をセンスがわりにして顔をあおぎだす。汗でシャツは背中に貼りつき、こめかみからもタラ〜。”[7] また11月、1月、3月は風邪を引いて咳をする受験生と同室になる可能性がある。[8]“…大学の教室なんて防音機能はなきに等しいから、隣の教室で同時進行している同じ内容のリスニングテストのテープが、数秒の誤差を持って、しかも反響つきで聞こえてくる。”[7] “なんと耳をつんざくような大音量でリスニングのパートが始まるではないですか。…あまりのうるささに自分の耳を押さえました。…カセット・デッキの音量は、あまり上げすぎると今度は音が割れたり、こもったりして逆に何を言っているのか分からなくなります。…何をしゃべっているのか声が割れて、よく分かりませんでした。”[8]という状態では明らかに不利になる。(アメリカでこんな試験をやればまず受験料返還の集団訴訟が起こるであろう。) 受験者数に応じて使われる(複数の)試験場に優先順位がある場合、受験申込書を発送する時期を選んで試験場をある程度変えるという手もあるようである。[8]

VIII. 私の TOEIC 受験体験

2001年12月12日(水)申込締切日の夜に受験申込書を投函した。(申込締切日の翌日までの消印有効。)特に時間をかけて準備をするつもりはなかったし、その暇もなかった。

受験前の準備：受験約2ヶ月前に1回と受験前夜に1回、*TOEIC Friends* [12] (2001年11月号と2002年1月号)のCDと模擬問題(2時間)を使って時間を計りながら練習をした。この2回の練習合計数時間が準備の全てである。TOEIC用問題集の類で何日間とか期間を書名に入れたものがいくつかあるが、その中では5時間というのが最短のものようである。[13]私の準備時間はそれに近い。

1回目の練習の一部[2001年11月19日(月)16:45-18:00 晴れ、最低気温4.6C、最高気温15.9C]は学生有志と講義室で一緒にやった。直前にあった教授会のため練習開始時刻に遅れて始めたので順序として逆だがReading Sectionのみやり、残りのListening Sectionは翌日[20日(火)18:00-18:45 晴れ、最低気温5.6C、最高気温16.6C]研究室で続けた。写真描写問題では写真のコピーの画質が悪くなく致命的であった。音響設備・機器もノート型パソコンのCDドライブを使って音声を出したので理想的とはいえなかった。Reading Sectionは順

番に, Listening Section も読み上げられる順にやった. 結果は Listening 91 % + Reading 80 % の 855 点. まともにはやっていたのでは時間が足りないと感じた.

2 回目の練習 [2002 年 1 月 26 日 (土) 18:40—20:40 曇り・雨, 最低気温 3.9 C, 最高気温 7.4 C, 正午の風速 4 m/s] は自宅で行った. この時はまともなオーディオシステムを使って音声を出したが大型トラックなどが家の前を通って聞き取れなかった個所がいくつか出た. 私は気候に身体を慣らすため自宅では一年中一切冷暖房を使わない. 室温は季節により 1 C—33 C くらいの範囲の間で変わる. この点耐寒, 耐熱, 全天候型の訓練ができています. [北米の -20 C や -30 C になる厳冬に比べると瀬戸内海気候には冬がない. 晩秋からすぐ初春になるように見える.] しかし, 1 月下旬だとさすがに寒く, 試験の性質上いったん始めると手を温める暇がなかった. この練習で Listening Section の “先読み” とか Reading Section で問題文を読む前に設問を先に読む “逆読み” とかを実行した. 今回は一通り最後までやり終わった時点で 15 分ほど時間が余った. 結果は Listening 89 % + Reading 87 % の 880 点. 間違った所を見直すと時間に追われているための読み間違い等のケアレスミスが多いことに気付いた. 実力を出し切れれば 900 点は十分超えられると見た. 勿論これはあくまで形式だけが同じの模擬試験問題であり実際の問題とは難易度も含めて違う.

2002 年 1 月 27 日 (日) の第 89 回公開テストは次のような時間割 (予定) で実施された.

12:00—13:00 受付, 受験者入場

13:05 プリインストラクション

13:20 休憩

13:30 確認及び問題用紙配布

13:40 テストインストラクション

13:45 Listening Test 開始

(Listening Test 終了後, ひきつづき Reading Test に移ってください.)

15:45 Reading Test 終了

15:46 終了後インストラクション

15:48 問題用紙・解答用紙回収

16:00 受験者退出

当日天候は晴れ, 最低気温 6.0 C, 最高気温 11.8 C, 正午の風速 6 m/s. 余裕を持って受付締切 10 分前の 12:50 頃試験場 (高松商工会議所: 1991 年 2 月完成の建物であったので受験時にはほぼ 10 年の古さであった.) に着いていたが 1 階の玄関から 2 階にある受付デスクまで受験者登録の長い列が階段にできていて試験室入室は 13 時過ぎになった. そのためか全ての項目は実際約 3 分遅れで進行した. 試験室はいくつかあったが比較的小さいほうの部屋の一つ (201 会議室: 定員 63 人) で受験した. この試験室では 21 個の机が正面に向かって 3 列ずつ並べられ, 3 人がけの各机は真中を空席にして 2 人がけで使われていた. (従って, この試験室での受験者数は 42 人以下であった.) 座席は最前列の中央左よりであった. 前があいているのが良かった. 試験室は TOEIC 運営委員会が決めるので選択はできないし座席も指定される. Listening Test で

は音響設備が重要である。大教室が試験室であれば、残響音、受験者数に比例した雑音等で不利なように思える。試験室の大きさ、空調設備、音響設備などは高得点を狙う場合特に重要な問題であるようである。幸い邪魔な雑音もなく、天井の複数のスピーカーからの音声の音質は良く音量も十分ではっきり聞き取れた。暖房もほどよく効いていて快適であった。最後まで全問回答した時点でおよそ10分ほど時間が余った。残り時間はReading Sectionの見直しに使った。1問どうしても意味の通らない問題があったが、2回ほど読み直して1つの単語の綴りを読み違えていたのに気付いて解決した。終了後手ごたえがあったというか、Listening Section, Reading Sectionとも特に分からない問題はなかったことに気付いた。従って後で辞書を引いて調べるとかは全くしなかった。

2002年2月25日(月)(晴れ, 最低気温0.8C, 最高気温11.5C, 正午の風速2m/s) 郵送されてきた試験結果の封筒を開けるときは興味津々であった。ひょっとしてという可能性が現実のものとなった。ただ受験を重ねて段段に点数が上がるということは体験できないことになってしまった。その意味ではこれからの楽しみがなくなった。またちょっと受験料¥6,615を損したような気分にもなった。

IX. TOEIC を評価する

(1) 概評

実用英語である。アメリカに暮らしてきて日常的に見聞きするそのままの英語に近いものが出されているという印象を受けた。仕事、買い物、新聞広告、手紙、通知その他、同じような内容のものはどこかで見たか聞いたことのあるものばかりであった。およそ使うことのない表現を出したりしていないという点で評価できる。試験中、問題に出された題材、語彙、表現など不自然なものがないかと注意しながら回答していったが、特にそのようなものは見受けられなかった。アメリカの生活で言葉には特に不自由を感じなかったのも、もし点数が悪ければ試験が悪いと言おうと思っていたが、その必要はなかった。[これは他の試験一般に当てはまることで準備をきちんとやっておけば試験問題そのものを評価できる。準備万端でも満点が取れないような試験は試験が悪いと言えよ。イリノイ州の運転免許証からオハイオ州の運転免許証に切替えるとき筆記試験があった。1問“間違っ”たのでその問題は道路交通法の記述に準拠した正しい設問にはなっていないと指摘すると、係りの高速道路警察官に自分は今機嫌が悪いから話し掛けないほうがいいと警告され取り合ってもらえなかったことがあった。]

(2) レベル

聞いたまま、読んだままが相手の意味、意図することであるという素直な問題である。相手の言うことを聞いてその背後の意味を探るといったことは要求されないし、文章を読んで行間の意味を推し量るということも必要ない。現実社会ではそう物事は単純ではないがそこまでは要求されない。[以下の(7) TOEIC 範囲外の高度なコミュニケーション能力の項を参照。]

(3) 形式

2時間で200問という時間の限られた試験である。Listening Sectionで1問あたり平均27秒、

Reading Section で1問あたり平均45秒が試験時間になる。実際多くのListening問題では5-6秒が反応時間の全てとなる。いわば反射神経を問われる。次々に標的が現れ限られた時間内に反応が要求されるクレイ射撃に似ている。Listeningでは1回しか問題文なり選択肢が読み上げられないのでちょっと聞き逃しただけで致命的になる。言葉の隅々まではっきり聞き取る能力が要求される。

語彙の要素：例えばある選択肢の中に知らない単語があり、それ以外の選択肢に正答がなさそうに見える場合苦しい選択を迫られることになる。知っている単語からなり、従って意味がわかるが、しかし間違っているように見えるものの中から選ぶか、知らない単語があつて意味のわからない選択肢を選ぶかの決断を迫られる。語彙数が少ないと明らかに正答率は下がる。

要求されるすばやい反応：さらに1つの問題に手間取っていると次の問題文が読み上げられ、初心者はパニックに陥るであろう。Readingでも時間との戦いになる。正確さを伴った速読が要求される。回答する問題数を絞ってじっくり問題を聞いたり読んだりするか、全問に回答できる速度で回答していくかのどちらかになる。

これらから分かるように反射的に短時間でどんどん回答していかなければならない形式の試験である。ある文章をじっくり読んで深い意味を探るとか、時間を十分にかけて言葉を選び文章を推敲するといった能力は問われない。ここに一つTOEICの大きな特徴と限界があるように思える。

(4) 限界1：話す能力と書く能力の試験の欠如

TOEICの限界の一つはその試験形式から明らかである。TOEIC側はPassive Skill (Listening, Reading) から Productive Skill (Speaking, Writing) も評価できるように作つてであると主張するが相関には限度があろう。確かに相関係数が調べられてはいるがあくまで集団の統計であつて個人差はあるはずである。[4] (I-2 ページ) 日本語には聞き上手、口下手という言葉がある。つまりこの試験は明らかに多人数が同時に受験できるように作られたPassiveな試験である。しかも答えは与えられた選択肢の中から選ぶ。実生活では口頭または文章による英語での問いかけに対して(口頭または文章により)英語で答えなければならない。つまり作文能力が問われる。その際、語彙、文法もきちんと知っていなければならない。そのような状況の試験をやろうとすれば一対一の口頭試問及び記述式試験になり費用の面で(試験実施方法として)実用的でない。また実生活では“これこれの内容をこういう状況下でこういう人に効果的に口頭で伝えよ。”とか、“そのような目的の書面を作成せよ。”といった作文能力も問われるがそれを試す試験でもない。

実際TOEICには730点以上取得者が取得後1年以内に受験できる20-25分間の面接からなるLanguage Proficiency Interview (LPI) という試験があることはある。⁵ 面接は1人のRaterと呼ばれる試験官によってなされ自由な会話の中で発音、文法、語彙、流暢さ、理解力などが総合的に評価される。その後、録音された面接内容がさらにもう1人-必要があれば2人-のRaterによって採点され、結果は0, 0+, 1, 1+, ..., 5の11段階評価で出る。これは米国国務省所属のForeign Service Instituteという機関が開発した他言語にも利用できる評価基準であ

5 ここに1年以内という期限が設けられているのはSpeaking Skill (もっと正確にはConversation Skill) とListeningやReadingのSkillとの相関をほぼ同時に調べるためであろう。

アメリカ中央情報局 (Central Intelligence Agency: CIA) によるスパイ養成などにも使われるという。2001年12月末時点で評価結果の分布は1(19.1%), 1+(22.5%), 2(32.8%), 2+(15.7%), 3(6.8%), 3+(2.3%), 4(0.6%), 4+(0.2%), 5(-)となっている。4割強が評価2未満を、5割弱が評価2と2+を受け、Non-Nativeで評価3以上は1割程度である。評価5は“Well-Educated Native Speaker”に匹敵する。本学教官の中でこのRaterを務められる先生(英語のNative Speaker)がおられ、その先生によれば、何かしゃべれると最低評価1はもらえる一方、少しでも外国語なまり (accent) があると評価5はもらえないそうである。この面接試験の受験地は東京と大阪に限られ、受験料は¥13,000である。2001年12月末時点で有資格者の内28人に1人(再受験を含む474,075人中、延べ16,943人)の割合でしか受験していない。2000年度データによると、公開テストで得点730点以上を取る割合は全受験者数の18%程度である。したがって公開テスト受験者の0.64%(156人に1人の割合)しかLPIを受験していない。私も受けていない。因みに満点990点の割合が全受験者数の0.1%程度(第89回公開テスト)であるとすればこの割合に相当するLPIの評価は4となる。⁶

(5) 限界2: 色々なレベルの能力を測る

“TOEICは英語能力を測るモノサシとして開発され、その範囲は下は10点という全く英語ができないレベルから、上は990点というNative Speakerのレベルまで至るといって非常に広いもの”であるという問題作成方法から分かるように色々なレベルの能力を1つの試験で測るように作られている。つまり初級、中級、上級といった別々の区分の試験を作らないで初級者、中級者、上級者が混じって受験する。従って、初級、中級、上級の試験問題が混在していると考えてよい。その結果として初級者から上級者まで点差が開くようになっている。これは長所であり短所でもある。長所は大学生から社会人、企業の新入社員から幹部までどんなレベルの者でも受けられ、得点で能力が比較できることである。従って先生が受験して高得点を取り学生に範を示せる。また、実力をつけることにより個人の得点が時間とともにどう変わるかを見ることができる。一方この形式では初級者にとっては難しすぎる問題がほとんどということになり、上級者にとっては少数の難しい問題で勝負ということになる。これは短所であり、問題集などで練習するとき工夫が必要になる。単にTOEICの模擬試験のような問題集では試験形式に慣れるのには良いが、実力をつけるのに効率がよくない。必ず含まれている自分のレベルより低い問題をいくらやっても無意味だからである。つまり自分のレベルに合った問題を多くやる必要が出てくる。

(6) 限界3: 文化的背景の分離

その国独自の文化的背景や言い方を知らなければ解答できないような問題は排除されているとある。しかし、実際には言い回し自体を文化的背景、習慣などと完全に切り離すのは難しい。つまり日本語で使われる表現の中で英語にそれに相当するものがない場合やその逆がある。例えば、英語では“You are right.”あるいは“You are wrong.”と面と向かってはっきり言うが日本語で

6 LPIで評価4を取得する者の公開テスト全受験者に対する割合は $0.6\% \times 0.18 = 0.11\%$ となる。

はあまり使わない。日本語の“お蔭で…”とか“いつもお世話になっております。”という表現などは英語にはない。直訳しても意味は伝わらない。⁷

(7) 限界 4：統計学的要素

複数回 TOEIC を受験すれば普通得点に変化するがどの程度実力の変化が反映されているのだろうか？ 毎回試験問題は異なる。ある受験者の得点が上がっても試験がたまたまその受験者にとってやさしかったからであれば実力が上がったとはいえない。この逆の場合もある。200 問という有限の数で実力判定をやると必然的に誤差が伴う。どの程度の得点の変化が有意かという重要な問題について日本語の文献 [5 - 11] では [5] を除いて全く触れられていない。しかも文献 [5] の記述は正しくない。この問題の答えの一部は *TOEIC Technical Manual* [4] に書かれているが、誤差評価という統計学で使われる専門的な事柄を持ち出さなければならない。これを一般化して（後で証明する！）分かりやすく書くと以下のような一連の表現となる。⁸

命題 1： 2 回の試験の Listening Section の得点を比べて ± 35 点以内の差であれば 68.3% の信頼度で実力の変化はなかったと見なせる。Reading Section も同じ。

命題 2： 2 回の試験の Listening Section の得点を比べて ± 69 点以内の差であれば 95% の信頼度で実力の変化はなかったと見なせる。Reading Section も同じ。

命題 3： 2 回の試験の合計点を比べて ± 50 点以内の差であれば 68.3% の信頼度で実力の変化はなかったと見なせる。

命題 4： 2 回の試験の合計点を比べて ± 98 点以内の差であれば 95% の信頼度で実力の変化はなかったと見なせる。

ここで注意すべきこととして、実際の得点分布はこれらの命題を導くときに仮定した Gauss 分布と異なるので、これらの命題を文字通り受取ってはいけない。特に平均点から大きく外れた得点に対してこれらの命題は成り立たなくなる。

これらの意味するところは重大である。2 回の得点を比べて、各 Section の変化が最低 35 点ないと 68%（およそ 2/3）の確率で実力が変わったとはいえない。ほぼ確実（95%）に実力が変わったというためには最低 69 点の変化が必要である。信頼度をどう設定するかによるがこれら具体的な点数以下の得点の変化に一喜一憂しても意味がないということである。連続して受験して得点が時々下がるという例は多い。さらに合計点では有意な得点差はかなり大きい。68%（およそ 2/3）の確率で実力が変わったと言うためには合計点で最低 50 点の変化が必要である。ほぼ確実（95%）に実力が変わったというためには 100 点近く（98 点）の変化が必要である。この

7 以下の XIII. 英語と日本語を参照。

8 命題 1, 2 は文献 [4] にあるが、命題 3, 4 はない。

非常に大切なことも受験者には明確に認識されていないようである。

例として山岡三子氏のスコア変化 [8] を分析してみよう。

	Listening	Reading	Total
1回目	460	370	830
2回目	450	395	845
3回目	480	425	905

1-2回, 2-3回, 1-3回の Listening の得点差は-10点, +30点, +20点で35点以下なので68%の信頼度でも実力に変化はなかったことになる。一方 Reading の得点差はそれぞれ+25点, +30点, +55点となり, 1-3回のみ68%の信頼度の場合有意に実力が上がったといえる。しかし95%の信頼度ではこの変化も有意とは見なせない。合計点はそれぞれ+15点, +60点, +75点となる。68%の信頼度では2-3回と1-3回に有意に実力が上がっている。しかし95%の信頼度では全て誤差範囲内となってしまう。“と, 3回目のTOEICチャレンジでまぐれにしろなんにしろ905のスコアをGETすることができました。” [8] とあるが, まぐれの可能性は十分にある。

練習問題1: 山岡三子氏がまぐれで905点取る確率を求めよ。

答え: 合計点の変化+75点はちょうど+1.5 σ (ここで σ は標準偏差, XV. 付録参照) であり86.6%の信頼度で差分標準誤差に一致する。即ち1回目830点の山岡三子氏がまぐれで905点を取る確率は13.4%あった。因みに彼女はそれを2回で成し遂げたが, 7-8回も試行すれば実力を全くつけることなくても達成できたであろう。(ただし900点くらいでも相対的に得点者数はかなり少ない。従って, これらの計算の信頼性はあまりよくないはずであることを断っておく。)

さらにこれから分かるように例えば1回の試験結果で2名の受験者の英語力を評価しようとするときには十分注意を要する。合計点で50点以内の差であればまず有意とは見なせないからである。

練習問題2: いくつかの与えられた点数の実力で990点をまぐれでとるには何回試行すれば良いか求めよ。

答え: 確率的に言えば940点の実力でも3回, 892点の実力でも20回試行すれば990点取れる可能性がかなりあることになる。ただしここでも, 990点は得点の上限であるから, 無限大の得点が存在する Gauss 分布では近似が非常に悪くなる。ここに書いたことは試さない方がよい。

(8) TOEIC 範囲外の高度なコミュニケーション能力

実社会では質問されることにそのまま率直に答えていけない場合がある。1988年, 大阪のアメリカ総領事館 (American Consulate General) での話。アメリカの大学が夏休みで日本に帰ってきていた時, 米国入国査証が切れていたの更新に行った。H-Visa (労働査証: アメリカ国内で働け, 最長6年まで更新可能) という種類のものの更新申請をした。先ず申請書類を記入・提出した後, 総領事が出てきてカウンター越しに面接があった。“米国入国の目的は?” とか “ど

のくらい滞在するつもりか？”といったことを（英語で）聞いてきた。それに対して口頭で返答すると“あなたの場合に適当なのは永久査証 (Permanent Visa) であるのでこの申請は却下する”と言われた。Visa をもらわないことにはアメリカに帰れないし秋の新学期から授業ができない。何かまずい答え方をしたに違いないと気付きはしたものの何がまずかったかということとはわからない。先ず却下されることになった原因が何かということを探らなくては行けない。そこでこちらから質問を始めた。そうすると向こうからの質問もどんどん来る。“日本の大学に職を応募しているか？”とか聞いてくる。質問の本当の目的が分からない限りもう単純に答えては行けない。各質問に対してあいまいに返答したりこちらから質問し直したりしながら領事の質問の意図を探った。そして相手の反応を見ながら最良の答え方を見つけ出していった。20分ほどカウンター越しの面接の後ついに今回はH-Visaを発給するというようになって一件落着となった。後でわかったことであるがこのとき滞在予定期間についての返答方法に重大な誤解をしていた。滞在予定期間は長ければ長いほど親米的でいだろうと思っていたので申請書類にそう記入し、口頭でも最初そう返答した。しかし本来H-Visaは短期滞在にのみ適用されるVisaなので滞在期間を短く書かないと発給されない。（この面接のことをアメリカ人に話したらしきりに感心していた。）

それから2年後の1990年京都大学で開かれた国際セミナーに招待されて日本に来たときまたH-Visaの有効期限に引っかかった。Visaは10月31日まで有効なのに対してセミナーは11月初めまでである。また大阪のアメリカ総領事館で更新しなければいけないが更新できるという保証はない。そこで対策として2種類の飛行機の切符を用意した。一つは10月下旬に来てうまくVisaが更新できたとしてセミナーに出て11月上旬まで日本に滞在してから帰るもの。もう一つはVisaが更新できなかった場合セミナーには出ないでVisaの有効期限内に日本を発って米国に戻る時に使う片道切符。日本に着くとすぐアメリカ総領事館でVisa更新の申請をしたところ今回はカウンター越しの面接なしですんなりと更新された。因みにVisaにあった署名から総領事は別の人に代わっていた事を知った。その後1991年Permanent Visa (Permanent Resident Card いわゆるGreen Card) を取得し⁹、それから10年して同時多発テロ事件の3日後、警戒厳重なClevelandの連邦政府合同庁舎の中にあるがら空きの移民帰化局¹⁰（通常は大変混んでい）で2011年まで更新してきたので、しばらく大丈夫である。

9 Permanent Visa を持つことによりアメリカ国内で無期限に居住でき、働ける。納税の義務はあるが選挙権はない。またアメリカ入国検査の際外国人ではなくアメリカ市民の列に並べる。よく永住権と呼ばれるが権利ではなく正確には永住許可である。応募にはまず州からLabor Certification (労働許可証) を発行してもらう。その際、当該外国人が労働することによりアメリカ市民の職を奪うことにならないという証明が必要になる。大学教官の場合具体的には、本人採用時の選考に漏れた応募者のリストを添付し、その専門分野の人材は本人以外にいなかったということを大学に証明してもらう。その後でPermanent Visa を応募する。応募書類には身体検査結果も必要で、HIV 検査他もろもろの麻薬検査があった。全部で取得まで2-3年かかりその間国外へは出られない。一時出国したい場合Parole (恩赦) を申請する。言葉の上ではまるで犯罪者扱いとなる。最後に通知が来て面接に出頭し、簡単な質問の後、あらゆる指と手のひらとの組み合わせで指紋を採取され[FBI (Federal Bureau of Investigation: 連邦捜査局) File に載る]、カードが郵送されてきて一連の応募過程の終了となる。後で述べるようにこのような手続きを弁護士を通さず全部自分でやると英語力がつく。

10 Immigration and Naturalization Service (INS) は米国司法省の中にあつた部局、同時多発テロ事件後、この部局は分割・移管されたあと廃止された。2002年11月に成立した国土保安法に基づいて新たに国土保安省 (Department of Homeland Security : DHS) が作られその中の市民権・移民局 (Bureau of Citizenship and Immigration Services) が現在査証発給業務を行う。

外国人の英語を書く力がどのくらい上達しうるかを示すいい例としてロシア生まれの小説家 Vladimir Nabokov (1899—1977) をあげたい。彼は 1919 年 20 歳でイギリスへ渡った後ヨーロッパ各地で住み 1945 年アメリカの市民権を得ている。彼が英語で書いた小説 *Lolita* (1955) は“女性の魅力のピークは 12 歳にある”と言う議論の余地があると言うか、ある意味であたりまえと言えああたりまえ¹¹の主題をもつ小説であるが、その題材ゆえアメリカでは引き受けてくれる出版者がなくフランスで発禁本を専門に取り扱う出版社から出版されたといういきさつがある。内容はともかく、この小説の英語の使い方たるや言葉の遊びと言っていい駄洒落的なものが数多く出てくる。外国語としての英単語の発音を良く分析しこれほどうまく使いこなせるものかと感心する。丁度和歌の掛詞に相当するようなものも多くあり、¹²この点を比較研究すれば卒業論文が一つできるであろう。

X. 英語の勉強法 (日本編 —1977)

中学校、高校では基礎を学ぶという点で非常に大切である。授業などで使う教材の量はさほど多くないが、基本的構文、文法など大学以降でずっと使いつづけるものを習う時期である。特に文法は高校までのレベルではほぼ重要な部分は出尽くしている。その後さらに大学、大学院と授業で英語を継続して学ぶ機会がある。中学校(つい最近は小学校)から大学院までの授業を有効に使うべきであろう。因みに大学入試のための受験勉強も決して悪いものではないと思う。読解、文法、作文など受験のための英語ができれば実際にも役に立つ。逆に、受験のための英語つまり大学入学試験問題に出るような英語一くらいができないようでは先で伸びない。(これは他の科目でも同じ。) 不完全な文法の力ではまともな文章を書いたり、話したりできない。アメリカに長く暮らす日本人の中にもまま見受けられるが、broken English になって明らかに教育がないと思われかねない。

(1) 読む

語彙：ある程度の語彙数は必要である。いちいち覚えるしかない。文章を読むとき辞書を引きながら単語帳を作る。それを繰り返し使い単語を覚える。分からない単語は必ず辞書を引く。これはいまだにやっている。第二外国語のドイツ語でやったことであるが単語集 5,000 語とか 10,000 語とかを買ってきて、毎日 500 語ずつ暗記した。勿論ほとんどは忘れるが、忘れる数より多く覚えれば良い。5,000 語であれば 10 日で繰り返すことになる。2ヶ月やれば 6 回繰り返せる。この場合ただ単語を眺めるだけでなく、書いて覚えることにより Spelling が確かなものになる。因みにドイツ語では東京の Goethe-Institut(ドイツ連邦共和国の文化機関)で授業を受けたり、検定試験を受けて Zertifikat というものをもらったりした。そして Deutscher Akademischer Austauschdienst (DAAD) というドイツ留学試験(筆記と口述)に合格したが年齢制限の上限 32 歳に近い合格者から優先順位がつけられ、結局行けなかった。(行っていたらこの小文の代わりにドイツ語について書いていたかも知れない。) よく考えてみると英語で

11 72 歳と比べて。

12 Native Speaker の中で押韻の大家は William Shakespeare (1564-1616) であろう。

は語学学校の類は全然行ったことがない。全くの自己流である。

(2) 書く

文章1つとか2つとかの初歩的な作文の場合決まりきった表現を覚えることと、正しい文法で書くことである。長い作文の練習には単に文法的に間違っている文章や、表現の間違った文章を多く書いても上達しないので添削者が必要である。

(3) 聞く

英語教育番組の活用：中学時代には「基礎英語」引き続いて「英語会話」というNHKラジオ第2放送の英語番組を聞いていた。当時前者はイギリス英語だったような気がする。NHKラジオ第2放送番組を最近調べてみると前者は増えて「基礎英語1-3」に、後者は「英会話レッツスピーク」、「英語リスニング入門」、「ビジネス英会話」などの番組に変わっていた。その他NHK教育TVでは現在「英会話」、「はじめよう英会話」、「英語ビジネスワールド」などがある。現在これらの放送時間はラジオ番組で各15分間、TV番組で各20分間である。その他テレビの2ヶ国語放送などは非常にいい練習になろう。ラジオ、テレビ番組の活用は文献[6, 8, 9]でも推奨されている。

FEN (Far East Network : 米軍の極東放送) の活用。これは役に立った。毎時ニュースが5分ほどある。それを一つ録音する。テープを聞きながら書き取る。分からない部分は何度も聞く。それでも分からない部分はアメリカ人に聞いた。大学院時代住んでいたところの近くの食堂でよく見かけるアメリカ人の老人に頼んでみると快く引き受けてくれた。聞き取れない部分を時々まとめて持っていった。彼は貿易会社に勤めていて、居間にはRakhmaninovの音楽が流れ、1911年版の*Encyclopaedia Britannica*が並んでいた。そのアメリカ人にも聞き取れない部分があった。FENはAM放送であり特に特派員のしゃべる録音されたものなど音がかなり歪んでいたし、周波数帯域が狭くて聞きづらく、逆にいい練習になった。当時Jimmy Carter米大統領(在任1977-1981)による活発ないわゆるCarter外交が展開され始めた時期で2002年度のノーベル平和賞受賞と聞いて感慨深い。このようにNative Speakerに英語を教えてもらう場合、ただ「英語を教えてください。」と頼むと相手に教育経験がない場合負担が大きくなるので、何をどう助けてもらいたいかをはっきり特定したほうが良い。とにかく完全に聞き取れるようになる訓練をした。これによってニュースを読む普通のスピードで発音される単語が聞き取れるようになった。時事関係の語彙も増えた。

最初、音声教材用メディアの種類は限られていた。レコード、モノラルのテープレコーダー(オープンリールデッキ)、しばらくしてカセットテープが出てきた。従って、私の英語は言わばアナログ時代に習得した英語である。現在はCD、ビデオテープ、DVDなど豊富にあるし、頭出しなどの機能があり格段に使いやすはずである。

(4) 話す

発音：Native Speakerの発音を聞き、発音を直してもらうのが良い。中学生の頃アメリカ人について発音の練習をした。アメリカ人の宣教師で当時高松にあったアメリカ文化センターにも

関係していた人である。[アメリカ文化センター(1952—1972)は日本国内13都市に置かれていた。現在5都市にあるアメリカンセンター(1972—)はこれの改称されたものである。]何時の間にか高松のアメリカ文化センターはなくなっていたが、これは日本の経済成長の結果であると、つい最近大阪のアメリカ総領事館の領事から聞いた。

会話は基本的言い回しを習得するためテープ(今ならCD)を使って練習すればよい。ドイツ語での話であるが、Deutsch für Ausländer というテープを使った。初級、中級各7—8時間のもので、応答を要求する会話から成り立っていて、毎朝7時から30分ずつ練習して3ヶ月ほどで各3回繰り返しかなり話せるようになったのを覚えている。

最近CD、ビデオテープ、TVと手段は多いので活用するとよい。私自身はTVを持たない。授業で使うデジタルビデオカメラのモニター用にと研究室で、最近生まれて初めてカラーTVを買った。勿論巷の番組に興味もなければ見る暇もない。(昔、栄華の巷低く見てと言う旧制高校寮歌があったが最近の巷にはもはや栄華はなくなった。幸いデジタル機器はあふれている。)

XI. 英語の勉強法 (アメリカ編 1977—2000)

アメリカ滞在は通算23年になった。現在も1ヶ月単位で毎年2—3回出かけているので英語環境に触れる機会が多い。

(1) 読む

読む動作というものは視覚にはいつてくる、書かれた表現から内容を把握することである。つまり記述言語から概念へと変換する過程である。読む速さはこの変換の速度による。ただし変換は一語一語行われるのではないように見える。先ず文章の始めを読むといくつかの単語が目に入ってくる。これらをkeywordの集まりと考えてだんだん内容の範囲を狭めていっているように思える。文章一つ読んだ時点でこの後大体どういう内容が来ることが可能かということ予想し、次に来るものをある程度期待しながら読むという動作に移る。例えば経験でAという内容が来ると80%の確率でBという内容が来ると分かっていたら、Aを見てBが予想できる。従って、通常次々と全く未知の物を読み進むということにはなっていないはずである。ここで経験をつむには多くの文章に触れる、つまり多読の必要がある。

Research Papers, Committee Reports, Newspapers, Announcements, Lettersと読む材料は多い。読解力はある程度読む量に比例する。

(2) 書く

自分のやっている作文という作業をよく考えると、一語一語綴っていくのではない。むしろ書きたい内容に最適な表現を探してつないでいっている。つまり表現の単位が単語ではなく句であったり、節であったり、場合によっては文章であったりともっと長いものであるように思える。いろいろなことを表現するのに大体決まりきった言い回しと呼べるものがある。これは陳腐な表現と言う意味ではなく最もよく使われる最適な表現という意味である。そういう表現を一つ一つ習得していくことが大切である。例えば一つの論文をとって順々に標準的な言い回しをリスト

アップして覚える。逆に決まりきった言い回しを知っていれば読むときにも役に立つ。見慣れた表現からすぐ著者の伝えたい内容が分かるからである。この点、英作文をやるのに先ず日本語で作文しそれを英語に直すなどというのは全く良くない。特に一語一語辞書を引いて英単語に直したのではまず意味のある英文にはならない。いきなり英語で書き始めるのが正しい。さらにあるまとまった内容を伝えるのに順番に使う言い回しもある。例えば "It is true that ..., but" といった譲歩の表現。"It is true that..." のところで身構えて "but" が出て来ることを予想しその後をよく読む（あるいはよく聞く）。

アメリカでは文書というものは非常に重要である。全ての契約事項、約束事項、重要な通知などは必ず文書で残され、文書で送られる。日本でよく行われる口頭での約束、通知の類はない。そのため書くことが重要な意味を持っている。

Ph.D. Thesis: 150 ページ余りのタイプされた博士論文（厚さ 2 cm, 重さ 0.7 kg）が英語で長い文章を書いた初めてのものである。Oxford 出身のイギリス人の指導教官に原稿を見てもらった。イリノイにおける周りの指導教官の中には大学院生に毎日やるべきことを指図し次の日に成果を聞くタイプ（出張中でも長距離電話を毎日かけてくる）から完全自由放任型まで様々あった。私の指導教官は後者の極に近かった。先ず半年契約でイリノイ大学とデンマークの北欧理論原子物理学研究所（Nordita : Nordisk Institut for Theoretisk Atomfysik）を行き来するので半分はアメリカにいない。アメリカの大学院ではあらかじめ定められた修業年数はなく、大学院生の修業年数が長くなっても指導教官の責任とは見なされない。大学院生自身の自覚と責任で学位に向けて研究することになる。各 3—4 ヶ月程 3 回デンマークへ同行した。大学院の最終段階にデンマークで博士論文を書いていた頃、指導教官はいつものように忙しかった。夏の期間中研究所で研究会があるというので昼間には時間がない。そこで早朝、彼の自宅で見ってもらうことになった。毎朝通って 6 時過ぎに始め、朝食を一緒にして 8 時半頃終わるとというのが延べ 5 週間程続いた。玄関の呼び鈴でよく彼を朝起こすことになった。（まあ大変な院生を持ったもので今になって彼を気の毒に思う。）こうして指導教官の格調高い Oxford English で訂正された手書きの原稿が出来上がっていった。初めての本格的な文章修行であった。イリノイに帰ってタイピストを雇ってタイプしてもらい費用がおよそ \$500 かかった。当時アメリカの大学では学科あるいは研究グループごとにタイピストという職種の人々がいて、IBM 電動タイプライターが機関銃のような音を立てていた。日本の大学にも秘書という種類の人々がいたがタイプの速さには格段の差があった。まさしくさすがアメリカであった。まだパソコンが出回る前で、word processing は main frame と line printer を使えばでき始めた時期であった。博士論文は 2 つの学術誌に各 1 編の論文として投稿し、印刷されたもので指導教官との共著 17 ページと単著 49 ページとになった。（もう 20 年も経つが両者ともいまだに引用され続けている。旅費とともに研究者待遇で給料を出してくれた北欧理論原子物理学研究所の初期投資は十分その見返りがあったと思う。）

Business Letters:

英文の手紙の書き方には定まった形式がある。日付を一番上に書き、return を 4 回やった後、あて先を書く。その後 return を 2 回やって、Dear Mr. X: でさらに return を 2 回やって本文を書き始める。時候の挨拶抜きでいきなり手紙の目的、本論に入る…。全て左端をそろえる形式や

日付、署名は右端にするものなど若干の種類はあるが、どれか一つきめて使えるようにしておくべきである。

Application Letters は職に応募するための手紙で履歴書、論文リストなどをつけて出す。大学の定職を公募する場合多いときには 100, 200 と応募があるので Short List(多数の応募者の中から先ず 10 人位を選んだリスト)に残るべく自分をアピールする文章を書く必要がある。

Curriculum Vitae (CV, Vita, Résumé: 履歴書):

職の応募は勿論、研究費申請書、業績評価など年に何回となく提出するもので、常に update しておく必要がある。論文リストとともに、論文を投稿した (submitted to Phys. Rev.), 受理された (accepted for publication), 印刷中 (in press), 出版 (published) と何かが変わると update していた。履歴書で日本と大きく違うところは生年月日を書く必要のないことである。生年月日は明らかに個人情報に属するからである。[アメリカでは大学の職に定年はないし、軍隊、警察などの特殊な職種を除き採用一般において年齢(並びに性別、人種、出身地、国籍、宗教、配偶者の有無、子供の有無、障害の有無など)を条件として使うと法律違反になる。さらにそれぞれの組織に採用された人員構成も政府によって監視され、これらの条件で偏った採用がなされていると見なされると罰金が科される。そうは言っても採用される minority は定義により元々少ないので、統計上それを是正するために「外国出身で障害のある女性」は採用候補者として理想的とされる。] アメリカの大学では公表している人を除いて、同僚の年齢は知らなかったし、調べる手立てもなかった。いろいろな印刷物や website での教官の紹介で先ず生年月日が来る日本と全く違う。欧米では特に女性の年齢に関しては配慮をする。ところが日本では“堂々と”女性教官の生年月日も掲載していて、日本女性は自信があるのか、強制的に掲載されるのか。年齢は知らない方が奥ゆかしくていいのではないかと思う。

Government Forms:

税金申告書、査証申請その他のもろもろの政府機関の書類。弁護士などに頼らず自分で書くことにより読解力と作文力がつく。どこの国でも政府機関の書類には難解な記入要領がついていてそれらを読みこなせるようになる一人前である。勿論誰が読んでも分からない部分はある。

Annual Report of Professional Activities:

教官が毎年年度始めに提出する過去 1 年間の業績報告書である。これによって次年度の昇給額が決まり、昇格人事にも使われる。業績があっても報告書に明瞭かつ効果的に書かれていなければ評価されない。作文力で昇給が左右される可能性があり、気合が入る。このような状況下で作文をすれば上達する。

Research Grant Proposals:

研究資金申請書である。定められた形式に従って書く。英語として不備があれば不利になることは間違いないので高度に専門的な内容を完璧な文章で書かねばならない。

Committee Reports:

委員会の決定事項も必ず文書に残す。次の審査段階へも文書で行く。従って委員会に所属すると報告書を書かなければいけない。公式文書であるから初歩的誤りなど許されない。人事委員会のものであれば評価されるものの一生を左右する重要文書である。

Research Papers:

正しい文章を書くには添削をしてもらうのが良い。その際なぜ訂正が必要かということの説明があるとさらに良い。この点私は理想的な教師に恵まれた。Toledo大学の同じ学科の教授で英語に関してかなりの知識をもっているYale大学出身、Caltech Ph.D.のアメリカ人である。論文を書くたびに持って行って添削をしてもらった。分野が同じということもあって内容に対してもコメントをもらった。学術論文の場合分野が違うとなかなか添削は大変であろう。文法的誤り、冠詞、意味が通じにくいとか、意味があいまいであるとか単に直してもらうだけでなくなぜ直さなければならないのかの説明もしてもらえた。同種の表現と比較したりして定量的に表現の適切さの度合いがわかるようになった。またどちらを使ってもよい表現が二つあるとき“英語では一字でも短い方が良い。故にこちらが良い。”というようなことを徹底的に仕込まれた。作文の極意はこの教授に負うところが大きい。添削をしてもらう場合原稿の文章がほぼ完璧の状態ではなくては相手の迷惑になる。初歩的な文法の誤りがいたるところにあるとか、意味が通じない文章がかなり多くあるとかの場合、添削といっても実際書き直すことになり、添削者の負担が大きくなりすぎる。例えば何十ページの論文原稿で1ページに何箇所も訂正が必要であれば添削するほうも大変である。

Refereeing:

学術雑誌から時々査読を頼まれる。投稿された学術論文原稿が出版される価値があるかどうかを判断する専門性の高い無償のサービスである。投稿された原稿を精読し、レポートを書くので読むことと書くこと両方をやることになる。中身が大切なので言葉だけの問題に終わらない。原稿に書かれていることは科学的に正しいか、重要で、新しいことをしたか、今まで知られていたことに対して、我々の認識がこの研究によってどう変わるのか等が明確に書かれているかどうかをチェックする。科学的に間違っていれば、理由を書いて直ちに没にする。改訂、訂正すれば出版する価値のある原稿に対しては不備な点を具体的に指摘し、どう変えるべきであるかをレポートに書く。そのまま訂正なしで受理することを推薦したことはまだ一度もない。なかなか時間と労力を要する仕事であるが、作文力は確実につく。

(3) 聞く

書くことと聞くことには似た要素がある。書くという動作では書きたい内容を適切な表現に直していく。概念から具体的な言語による表現を行う。一方聞く動作というのは順次はいつてくる音声によって内容を理解する。音声による言語表現から概念をつかむ。先の“書く”という所で触れたように表現したい内容をあらかず決まりきった言い回しというものがある。従ってそういう表現が出てくると言いたいことがすぐ分かる。外部からの情報を取り入れて処理するという点で聞くことは読むこととよく似ている。読むことについて書いたように、聞くという動作でも

次々に全く未知な内容を聞き続けるということは通常ない。あらかじめ内容を予想しある程度次に来る事柄を期待しながら聞いているはずである。従って、要所要所をきちんと聞けば少々聞き漏らしても内容は把握できる。

Lectures:

英語での講義を聞き始めて2-3ヶ月たつと努力しなくても耳から英語が入ってくるようになったのを覚えている。よく使われる表現にある程度慣れてくるからである。

Seminars, Colloquia and Meetings:

専門家の話を聞くことによりよく使われる表現を知ることができる。覚えておけば自分がSeminarなどで話すときにも使える。

(4) 話す

発音：日本でよく練習していたので問題はなかった。デンマークにいた頃 Cambridge 大学から来た先生に「おまえは日本人にしては珍しく“r”と“l”の発音の区別がきちんとできる。なかなかよらしい。」と半分からかわれたことがある。“r”が正確に発音できると英語らしく響くようになる。「外国語なまりがないので気味が悪い。」とアメリカ人に言われたこともある。

90年代初め Sabbatical Leave(アメリカの大学教官に与えられる7年目ごとの有給休暇の年)を使って Alabama 州 Huntsville 市にあるアメリカ航空宇宙局(NASA) Marshall 宇宙飛行センターで研究をしたことがある。[このセンターは米陸軍 Redstone 兵器廠の中にあり車でゲートを通るとき歩哨が敬礼してくれ、こちらも軽く敬礼して将軍になったような気分になる。これも後には人員削減でなくなった。敷地内の車両の制限速度は 80 km/h である。]その帰り Tennessee 州で日本の中学生時代英語を習ったアメリカ人と何十年ぶりかで再会した。中学生時分には気が付かなかったことだが、彼女の英語には南部 accent があることに初めて気が付いた。確かに Tennessee と言えば南部である。私は中西部で長く暮らしたので標準語を話す。因みに映画などで登場人物が話すのを聞けば語彙、言い回し、accent 等からその人物のおよその出身地、社会階層などが分かるものである。日本語に訳されてしまうとこれらは失われる。また何が滑稽で何が恐怖心をそそるかという事には文化的違いが大いにある。コメディ映画などでアメリカ人が笑うところが日本人にとっても面白いとは限らない。Horror Movie でアメリカ人の怖がることは必ずしも日本人にとって怖くない。一方、冗談の類はかなり難しいことが多い。特に、アメリカ人なら誰でも知っていることをふまえたものでもそれが幼稚園または小学校の時期に習うものであるとき外国人にはなかなか理解できない。

読むことと聞くことが良く似ているように、書くことと話すことはよく似ている。書くという動作では書きたい内容を適切な書き言葉の表現に直していく。ある概念から具体的な言語による記述表現を行う。一方話す動作というのは言いたい内容を順次適当な話し言葉の表現に直していく。ある概念から具体的な言語による音声表現を行う。書き言葉と話し言葉とは若干違うが大体同じである。うまく話すには原理的に話す速度より速く作文すればよい。この作文の速度にある閾値があるように思う。作文の速度がこの閾値より遅いと、不自然な話し方になり、この閾値を

超えると自然に話せるようになる。しかし作文といっても私の場合、頭の中に文字で文章が先ず浮かんでくるわけではない。漠然とした何か言いたいことが先ずあり、それを具体的な話し言葉に変えていく作業である。一般に使われる“言葉にならない”とか“適当な言葉が見つからない”“うまく言葉で言い表せない”などという表現は言葉で話すときあるいは書くときに必ずしも表現したい内容が具体的な言葉と対応が見つからない、従って、少なくとも部分的には作文の過程に文字を使っていないという証拠であろう。ぶつぶつと自分の今やっていることに関する独り言を言いながらでないと行動できない人がいる。言語と行動の関係を探るのに面白い対象であろう。一方、法律では人間の考えられる行為すべてを言葉で定義したり規定したりする必要がある。できる訳のないことだが、そこは“条文の解釈”と裁判所の権威とで補っている。先の“書く”という所で触れたように表現したい内容をあらわす決まりきった言い回しというものがある。そのような表現は話す場合にもほぼ同様に使える。

イントネーションとリズム：話すとき日本語と英語の大きな違いには発音とイントネーションとリズムがある。先ず日本語にない英語の発音は正しく発音できるように練習する必要があるが、さらに重要なのがイントネーションとリズムである。英語で話す場合英語らしく聞こえるためには、英語独特のリズムを会得する必要がある。例えば“これは私の欲しかったものではない。”“This is not what I wanted.”という2つの文章を比べてみよう。これらを非常にゆっくりと読みあげると、日本語では“こ／れ／は／わ／た／し／の／ほ／し／か／っ／た／も／の／で／は／な／い。”と一字ごとに区切られる。これを日本語の等拍性 (syllable-timed rhythm) と言う。“各音節の母音が(平等に)ほぼ同じ強さ同じ明確さで発音されしかも原則的には一子音プラス一母音という単純な構成の音節の繰り返しであるために、各音節が時間的に(平等に)ほぼ同じ長さで発音される。”[学研国語大辞典 第二版 (1988)] (音節の強さ、明確さ、長さの平等主義。) さらにゆっくり読むと、スラッシュを入れたところに時間が使われるが意味は通じる。一方、英語でゆっくり読みあげると、“This/is/not/what/I/wan/ted.”のように母音を中心とした音節ごとに分割されるのではなく、むしろ4拍子で“This is/not/what I/wanted.”と4区分される。“i/o/a/a”というそれぞれの最初の母音に強勢がある。1, 3, 4番目の部分には母音が2つずつあることに注意。2番目の not には母音が1つしかないのでリズムを合わせるために強く長く発音される。まさしくこの文章の一番大切な単語である。[アメリカ人が不満や怒りを表明するときこのように発音する。] つまり英語では強勢 (stress) の置かれる音節がほぼ同じ時間間隔で現れ、stress-timed rhythm と呼ばれる。極端に言えば、このリズムさえしっかりしていれば“This/not/what/wan.”でもアメリカ人には十分意味が通じると思う。逆に、強勢の置かれない音節は弱くあいまいに発音される。そのような音節をも日本語と同じようにはっきりと発音してしまうと自然な英語とは聞こえない。そこで、英語らしくしゃべる訓練には、逆説的であるが、非常にゆっくりと英語の文章を読みあげてことを勧める。これは強勢をどこに置き、どこを続けて、どこを区切るかという練習になる。このことは英語を聞く場合にも重要な点である。強勢のある部分部分を中心に聞くことになるからである。ここでやっていることは音節単位で分けてしかも意味が通るように曲に節をつける作詞あるいは作曲の過程に似ているように思う。(作詞・作曲過程で英語と日本語の言語から来る違いの比較も面白い卒業論文のテーマである。)

この例の文章では全体として最後の wanted で音程が下がり文章が完結するまで、それぞれの

単語は次にまだ何かが続くことを予想させるように発音される。いくつかの文章が続くときも同様で、英語では一連のまとまりのある複数の文章が終わるまでまだ何かが明らかに続くということが分かるような独特のイントネーションとリズムを伴う。この特徴のため、英語で話している人に対して話をさえぎったり、割り込んだりするタイミングを探すのはなかなか難しい。話し終わるまでしばらく待たなければいけないことがしばしばある。これに対して、日本語では比較的平坦に発音が続く。“これは私のほし(星).”に“かったもの”をつければ“これは私のほしかったもの。”になるし、さらに“ではない”をつけて“これは私のほしかったものではない。”になる。最初の部分“これは私のほし.”の発音はこの3つの文章とも実質的に同じである。このように日本語には1つの文章中にある単語間の発音的なつながりや、複数の文章をつなぐためのリズムなどがあまりない。それゆえ日本語をしゃべるように英語をしゃべってはいけない。

一方、イントネーションは音程の上下であり、音声の振動数を正しく認識して聞き、正しく発声する練習が必要である。言語のこの要素は音楽一般、特に歌唱などと関係が深いように思われる。可聴域振動数認識・発声障害(旧称音痴)があると困難である。

さらにもう一つ、大きな声を出して英語をしゃべる練習もよい。(大勢の前での講義、講演などが特に良い。)大声では発音のごまかしがきかないからである。また正しい発音、イントネーション、リズムでしゃべればエネルギー消費が少なくて済む。逆に正しくないしゃべり方では不自然でエネルギー消費が大きくなり大声が出ない。言語というものは一般的に話し言葉で発音がしやすいようにできているものなのである。

英語をしゃべるとき日本語をしゃべるときと声音が変わる人がいるがこれもよくない。のどに力が入りすぎているためである。

電話：

初心者にとって難しいのが電話での会話であろう。相手の顔が見えず、情報が相手のペースで音声によってのみ入ってくる。また話す場合もこちらがしゃべったことのみ伝わる。何かを示したりする“補助手段”も一切使えない。そのために、逆に電話は会話のいい練習になる。しかしアメリカでは最近電話をかけて人間と話をすることが難しい。電話をかけると先ずmenuと呼ばれるものが出てきて何の目的で電話しているか順々に選択していくことになる。この案内も人件費削減のため computer voice によっている。大きな組織であると外からかけたのでは目的のところに達するまで非常に時間がかかる。目的のところに到っても何の用か留守番電話に伝言を置くようになっていることが多い。資料請求の類は大体留守番電話が多く、住所、電話番号を beep の後に残すことになる。四半世紀前、組織に電話をかけると必ず人間が出たが、最近ほとんど computer が出る。

Job Interview:

面接は就職の可否を決める重要な要素である。教官公募の場合応募者の中から3-4人を選び Interview に呼びその結果で1人に決める。1時間程度で自分の研究テーマで公開の講義をする。聴衆は大学院学生と学科教官である。この講義のやり方から研究の質の評価、授業ができるかどうか等を判断する。Interview では人事委員会、学科教官、大学院学生、学科長、学部長などと

も面接をする。

アメリカで大学院生から Postdoctoral Position の頃、人前で話す機会が増えた。例えば研究グループのセミナーの当番で 50 分使って研究紹介をやったり論文紹介をやったりした。さらに定職を得てからは授業がある。1 回 50 分または 75 分で内容のあることを学生に分かるように話さなければならない。言っている事が分からないとか、聞き取れない、文法的に正しくないとかであれば、学生の授業評価は致命的になる。アメリカ人の学生は相手が外国人であろうと容赦しない。幸い英語に関して問題はおきなかった。学会発表もあるし Colloquium と呼ばれる講演のため他大学に招待される機会も増え、いつしか多数の聴衆の前で話すことに慣れていった。

英語で話すことが上達すると饒舌になるわけではない。的確な表現を使いよく意思が通じるので逆にあまりしゃべらなくて物事を処理できる。

以上いかにして流暢に英語を話すための練習法について述べてきた。ここで本当に中身さえあれば少々不十分な英語でも欧米人が一生懸命聞く場合もあることを付け加えておきたい。1985 年 8 月コロラド州にあるアスペン物理学センターで開かれた国際ワークショップの席上、日本からきた神岡グループのスポークスパーソンが地下ニュートリノ観測実験というものの現況報告を行った。神岡グループといえればそれから 1 年半後の 1987 年 2 月大マゼラン星雲で起きた超新星爆発からのニュートリノ 11 個を捕らえてそのリーダー小柴昌俊博士(1926-)が 2002 年度のノーベル物理学賞を貰うことになる。当然ワークショップでの報告は参加者の注目を集めた。完璧とはいいがたい英語でのプレゼンテーションではあったが、欧米の参加者は真剣そのもの解読に近い形で聞いていた。言葉の障壁のためかなりフラストレーションをたまらせてはいた。[この頃毎夏アスペンに 1-2 ヶ月滞在していた。ロッキー山脈の中にある保養地で海拔 2,400 m。周りには 4,000 m 級の山が多くあり単独登山をよくやった。9 月上旬に登山中吹雪に遭遇したこともあった。]

状況が状況ならアメリカで日本語をしゃべって十分通じることもある。イリノイ大学のある日本人の先生の年老いたお母様がアメリカに来られた。アメリカ人に対してニコニコしながらどんどん日本語で話し掛けるそうで、結構言っていることが通じているようだとその先生は言われていた。アメリカのデパートで日本から来た女子学生が買い物をした。欲しくて欲しくてたまらなかつたものをついに買った瞬間、“キャー、買っちゃった!”と日本語で思わず叫んだそうで、周りにいたアメリカ人が一斉に振り向いた。何が起こったのかアメリカ人はすぐ理解して皆笑ったそうである。

XII. 辞書, Style Manuals, etc.

英文を読んだり書いたりするにはいい辞書と Style Manual がある。よく使うものを参考文献に載せておく。アメリカでは本格的に英英辞典、つまりアメリカの国語辞典を使うようになった。

そもそも辞書というものは考えてみれば不思議な道具である。一つの言語において、ある単語をその単語を使わないで定義しようとする。そんなことができるならその単語はいらないではないかということになる。そうではないのもっと正確には、辞書において単語の意味を他の単語を使って近似的に定義すると言えよう。その単語に必ず同意語が存在し、それらに共通部分があ

るから辞書が機能するのであろう。これが2ヶ国語間にまたがる場合—英和辞典、和仏辞典などの場合—違った言語間に共通の単語が存在することが前提となる。

(1) 辞書の話

名実ともに最高のものは *The Oxford English Dictionary* (OED)[16] であろう。全20巻、総ページ数22,000、定義50万、引用250万、並べると厚さ1.2m、重さ68kgである。1857年ロンドン言語協会(1842—)が1150年以來の全ての英語語彙を含むように計画した辞書で初版は71年後の1928年に *A New English Dictionary on Historical Principles* 全10巻(総ページ数15,500)として刊行された。(1884年の第1巻の完成から44年かかった。)これは1933年に *The Oxford English Dictionary* 全12巻として改名され、補遺つきで再版され、現在出ているものは1989年の第二版である。1992年以來CD-ROM版もあり最近はOnline (<http://www.oed.com>)でも個人契約をするか契約をしている図書館を通して使える。特にOnline Versionは1993年以來、年4回ずつupdateされて来ている。この辞書の歴史と量にイギリスという国の文化の重みと自国語に対する真摯な態度を感じる。残念ながら日本では140年以上の歴史を持ち60年を経て改訂版が出るような20巻物の国語の辞典はない。もっと手軽なのが *The Concise Oxford Dictionary* (COD)[17](厚さ6.5cm、重さ1.6kg)、*The Pocket Oxford Dictionary* (POD)[18](厚さ5.8cm、重さ0.7kg)である。アメリカ英語では *Webster's Third New International Dictionary of the English Language* [19]がある。総ページ数2,700、項目数472,000、挿絵3,000、語源140,000で厚さ10cm、重さが5.7kgある。ただ1961年の初版以來大幅には改訂されていない。数年前出版社に問い合わせると20世紀中の改訂の予定はないとのことで確かにそうだった。1966、1971、1976、1981、1986、1993と補遺(Addenda Section)の形でのみupdateがなされてきていて現在66ページになっている。この辞書の起源はNoah Webster(1758—1843)が作ったアメリカ英語の辞書 *A Grammatical Institute of the English Language* 全3巻(1783—85)、*A Compendious Dictionary of the English Language* (1806)、*An American Dictionary of the English Language* 全2巻(1828)等にさかのぼる。*Grammatical Institute*の出版は大成功で第1巻の売上げは約1億部と推定されている。一方 *American Dictionary* はあまり売れず、1840年の改訂も失敗に終わる。1843年Websterの死後、相続人によってこの辞書の版権がSpringfield, Massachusettsの出版社George & Charles Merriam Company(1831—)に売却される。(この会社は1964年にEncyclopaedia Britannica, Inc.の子会社となり、1982年にはMerriam-Webster, Inc.と改称されている。) *American Dictionary* は次いで1847年、1864年と改訂され、10年かけたその次の改訂で *Webster's International Dictionary* (1890)となり *Webster's New International Dictionary* (初版1909、第二版1934)を経て現在に到っている。もっと軽くよく改訂されるものが *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary* [20](厚さ4.8cm、重さ1.6kg)である。Updateは毎年なされる。あと *The Random House Dictionary of the English Language* [21](厚さ9cm、重さ5.1kg)や *The American Heritage Dictionary of the English Language* [22](厚さ6.4cm、重さ3.5kg)等もいい辞書である。例えばgolden section(黄金分割)を引くと、COD[17]、*Merriam-Webster's* [20]、*Random House* [21]、*American Heritage* [22]いずれにもそれぞれ比 $(1+\sqrt{5})/2$ を導出できるだけの正確かつ十分な定義が与えられている。[これに対して、広辞

苑で黄金分割を引くと第二版（1969；重さ 2.4 kg）にはあった同様な正確かつ十分な定義が第三版（1983；重さ 2.7 kg）以来なくなり結果の比の数値のみ与えられている。国語辞典においても理数科離れが進むという由々しき状態にある。]また *American Heritage* [22] は同意語の違いの説明に詳しい。

科学技術の進歩とともに新語がどんどん出てくるので最新版の辞書を持つのに越したことはない。デンマークに滞在していたとき、住んでいた所のおばあさんに借りた英語—デンマーク語辞書には airplane という単語が載っていなかった。変だと思ってよく見るとこの辞書は 1905 年出版の骨董品であった。飛行機はまだ発明された（1903 年 12 月 17 日）ばかりであった。ヨーロッパ人は物を大切にす。因みに *Merriam-Webster's* [20] によると airplane という単語が最初に使われたのは 1907 年になってからである。

辞書というものは何時でも手の届くところに置いておくべきである。私は *Merriam-Webster's* [20], *Random House* [21], *American Heritage* [22] をそれぞれ 3 冊ずつ持ち、アメリカの office と自宅、日本とどこにいても使えるように実戦配備していた。

日本語にないので日本人にとってなかなか難しいのが冠詞 “a” と “the” である。“a” が一つのという意味で “the” が特定のものをさすときに使われるとだけしか知らないとしたら勉強不足である。辞書を引くことによって様々な用法が分かる。定義、用例の数は “a” と “the” それぞれについて、*Merriam-Webster's* [20] が 6, 20; *American Heritage* [22] が 4, 8; *Random House* [21] が 7, 12; *Webster's Third* [20] になると 14, 38 も載っている。“the” を 38 種類も使い分けることは通常必要ないが、中辞典 [17, 20—22] 程度の用例は知っておくべきである。

ついでにもう一つ。名詞の可算・不可算の区別は日本人にとって難しい。“たくさん宿題が出た。”というのに “homeworks” とはしない。“a lot of homework” である。仕事 (work), 宿題 (homework) は不可算名詞である。しかしこれが芸術作品のように仕事の結果、作品となると “a work of art” のように可算になる。Oscar Wilde (1854—1900) の言葉に “One should either be a work of art, or wear a work of art.” (1894) というのがある。[日本では、中学生以上の多くの女性が前者はともかく、LVMH Moët Hennessy Louis Vuitton (1854—1987—) の bag を持つことで後者を実行している。]また製作所、工場という意味では “works” と複数形にしてしかも “a chemical works (化学工場)” のように単数扱いになってなかなかややこしい。一つ一つ覚えて経験をつむしかない。どちらか分からないときには発音してみると分かるようになる。“homework” は正しいが “homeworks” は正しくないとすぐ分かる。後者の形で聞いたことがないからである。また、一つの情報、一つの証拠のように不可算名詞から数えられる形を作るのには a piece of information, a piece of evidence とする。

(2) Style Manuals

Punctuation について書かれたものは [23,24] など色々あるがもっとも薄いものの一つとして W. Strunk Jr. and E. B. White, *The Elements of Style* [25] を挙げておく。*Random House* の辞書 [21] にも数ページの Basic Manual of Style が載っていてこれでも十分である。

(3) 語源の話

漢字の組み合わせからなる日本語の単語であれば個々の漢字の意味からその単語の意味は想像

がつく。英語の単語の場合にも表音文字であるアルファベットで書かれているにもかかわらず、単語を分解することによってかなり意味が分かる場合がある。これは英語の単語の多くが語源にギリシャ語やラテン語を持つことによる。先にあげた辞書類では語源がきちんと書かれている。例えば consider という単語をとってみよう。考慮する、熟考するという意味であるが、もともとはラテン語の動詞（第一活用不定法現在能相）considerare からきた。これは com+sider- と分解できて、最初の com とは“一緒に”という意味から転じた“完全に”，“集中的に”（cf. completely, concentrate）という意味を持つ。一方 sider- は sidus = 星から来ている。つまり“星をよく注意してみる，観測する”というのが本来の意味である。人々が集まって製造，営業，販売活動をする会社 company や人々が集まってする商業，取引 commerce, commercial の com も同じ起源である。（ラテン語では commercium で merx はラテン語で merchandise のこと。）同類語に companion (com+panis) つまりパンと一緒に食べる人＝仲間がある。ドットコム (.com) と聞いて“consider”と共通部分があると気付くようになれば上級者である。ここに出てきた com-（後に続く文字によってこれの変化した形として co-, con-, col-, cor- などがある）が接頭辞 (prefix) である。同じように、接尾辞 (suffix), 語根 (root) でギリシャ語，ラテン語に起源のあるものが多くある。バイオ (bio-)，デモ (demo-)，インター (inter-)，イントロ (intro-)，マイクロ (micro-)，ラジオ (radio-)，リストラ (restructuring< re- + -stru-)，レトロ (retro-)，スーパー (super-)，ウルトラ (ultra-)，オーディオ (audio< -aud-)，グラフ (-graph-)，ジャンクション (junction>-junc-)，メカ (-mech-)，テク (-tech-)，テンポ (-temp-)，ビデオ (video<-vide-)，マニア (-mania) 等日本語でよく使われるものもたくさんある。[オーディオ (audio), ラジオ (radio), ビデオ (video) はそれぞれラテン語で“私は聞く，放射する，見る”という動詞の第四，第一，第二活用直説法現在一人称単数能相を無意識に使っていることになる。]日本語のこれらの単語は略記された形がほとんどであるが，知るはずのないラテン語の原形の接頭辞，接尾辞，語根を偶然かどうか，驚くほど正確に取り出している。これは発音がし易いという理由からだと思われる。（この検証も卒業論文のテーマとなりうる。）これらを系統的にリストアップしたものとして例えば *Random House Webster's English Language Desk Reference* [26] がある。この本では 46 ページにわたって (pp. 372-417), ギリシャ語，ラテン語の接頭辞 123, 接尾辞 132, 語根 376, 全 601 個が載せられている。これら各々に対して数語から二十数語の単語の例が併記されているので，ここに挙げられているものだけでギリシャ語，ラテン語に関係した英単語の総数は数千になる。私の担当する英語の授業では 4 ページずつ「みんなで覚えよう！」と言って宿題に出し毎週やる小テストの範囲の一部にしている。一寸接頭辞などの意味を調べるのにギリシャ語，ラテン語も小さい辞書を一つずつ持っているとう便利である。[27-29]

勿論英語は印欧語の一つであるから影響を受けたのはギリシャ語，ラテン語からだけではない。例えば，ケルト語，サンスクリット語との関係は？という疑問が湧いたときには *American Heritage* [22] の 46 ページの付録 “Indo-European Roots” が役立つ。

XIII. 英語と日本語

英語を論じるとき日本語の特殊性を考えざるを得ない。

(1) なぜ英語なのか？

そもそも TOEIC が存在するのは英語がよく使われる言語だからである。それは何故か？言語学的、歴史的要因、つまり英語の特徴と英語使用国の国際的影響力が考えられる。

まず、英語は分析的言語である。つまり比較的語尾変化が少なく簡単である。これは形容詞のついた名詞の数、格変化を英語と他のヨーロッパ言語（ドイツ語、フランス語、ロシア語、ラテン語等：これらは複雑な語尾変化を伴い総合的言語と呼ばれる）とで比較してみれば一目瞭然である。形容詞の語尾変化がないのはヨーロッパ言語の中で英語だけである。また英語には名詞と動詞の互換性がある。さらに英語の代名詞、形容詞、副詞には名詞的用法；形容詞、副詞には動詞的用法；名詞、代名詞、副詞には形容詞用法がある。例えば、野球用語 strike とか out とかは名詞であるが、もともと審判が打者に対して“Strike! (いいボールだったのにどんどん打て!)” “Out! (退場!)” と言ったのが始まりでそれぞれ動詞と副詞からきているという説がある。そして必要な単語は他言語からどんどん取り入れ、古代ギリシャ語、ラテン語から新語を作る。(語尾変化のある言語は規則的で面白いことは面白い。大学院時代にドイツ語の練習をしていた折、1つの文章を文法的に可能なあらゆる時制、法、態で変化させ同じ建物に住むスイス人にこれでいいかと見てもらった時そのスイス人は声に出して読んでいて舌を嚙んだ。)

もう一つの理由は大英帝国、次にアメリカ合衆国の影響力であろう。18世紀イギリスはヨーロッパで最初に産業革命を成し遂げた。(因みに18世紀まで世界の書物の大半はアルファベットではなく、中国語つまり漢字で書かれた。) その影響力は北米大陸に及びアメリカ合衆国が発展する。1776年の独立に至るまでイギリスの植民地支配が続く。つまり主要言語は英語であった。独立宣言も英語である。さらに1803年の米国による Louisiana 買収 (\$15M) によって1682年以来のフランスの影響力は失われる。フランス語は今の北米ではカナダで使われるのみとなる。1819年スペインよりフロリダを買収、1845年テキサス併合、1846年からのアメリカメキシコ戦争後1848年メキシコより Rio Grande 川以北を割譲し大西洋から太平洋に至る東西4,000 km 南北2,000 km の大陸を領土とする。“西部開拓”が進み1890年頃 Frontier が消滅する。(その後アメリカは国外に Frontier を求め1960年代に月とヴェトナム¹³、1970年代に太陽系の外惑星、1990年代以降ペルシャ湾岸を“開拓”してきた。) ヨーロッパであればどこにも既に国があって国家間の軍事力も似たり寄ったりなので、ヨーロッパ全土を“開拓”することなどできない。前近代的な北米先住民がヨーロッパからの移民に排除されたということである。それによって人工的な国境に囲まれ広大な領土を持つ国家ができた。天然資源は地球上に偏在するが大雑把に言って国土の面積に比例する。大きさは北米大陸を東西に移動するとよく分かる。初めて米国に行った時、Seattle から Chicago まで飛んだ。見渡す限りの大陸で、これから留学する場所として満足感があったのを覚えている。(これに対して日本列島を南北に飛ぶと高度10,000 m で日本海側と太平洋側が同時に見える。) California 州 Santa Barbara (西海岸) から Missouri 州 St. Louis (北米大陸の中央部) まで一人車で引越したとき、毎日 500 miles (= 800 km) を約10時間で運転して丸4日かかった。そのとき Anton Bruckner (1824—1896)、

13 ここで使う外国の地名の呼び方などは外務省の「在外公館の名称・位置・給与方法」(1952—2003)に使われていた表記に近い。これは2003年に改正された。

Gustav Mahler (1860—1911) 等の後期ロマン派の交響曲がアメリカの景色に合うことを発見した。(確かに Bruckner の金管部は大伽藍を前提としたものであるだろうし、Mahler の不協和音も広々とした空間にふさわしい。それぞれ $9 + 10 = 19$ と全曲通して聞く時間があった。) 一時 New Mexico 州で高速道路の前方後方とも地平線まで車を見ないことがあった。大陸横断には B747 なら時差抜きで 4 時間かかる。ヨーロッパの小さい国、例えばアイルランドなら B747 で 15 分あれば東西に横切れる。出張のとき、車で片道 2—3 時間以上かかるときは実質飛行機を使う。イリノイ大学では大学が飛行場を持っていたし、航空機操縦免許取得のための授業や演習(飛行訓練)も科目としてあった。(旧高松空港の元滑走路のほんの一部に建つ香川大学工学部とは大分話のスケールが違う。) 大学の出張費の計算規定表には自家用車でいくとマイルあたりいくら、民間航空会社の飛行機なら最低運賃、等という記述とともに自家用機を使う場合も載せられていた。数年前自家用ジェット機事故で亡くなった Chicago 大学の研究担当副学長がいた。またあるとき Santa Barbara 空港でレンタカーを借りる(日本語独特の変な言い方)つもりがどういう訳か小型飛行機を借りるのと誤解されて滑走路に連れて行かれたことがあった。第二次大戦以降米国は科学技術を発展させ経済的軍事的に Super Power の一つとして君臨してきた。国土の面積でアメリカは日本の 24.8 倍ある。これに対して、ノーベル物理学賞の受賞者数は 2000 年までは日本の 3 人に対して 74 人の 24.7 倍と驚くべき一致を示していたが、2002 年には日本の受賞者が 1 人増えて(33% 増!) $79/4 = 19.8$ 倍となった。過去 10 年間でも全受賞者数 26 人中アメリカが 20 人、日本が 1 人と圧倒的優位に立っている。

Fast Food Chain, テーマパーク, Shopping Mall, 郊外型大型店舗とか米国型消費生活文化の影響力も大きい。[私自身は Hamburger 等の Fast Food は人間の食べ物ではないと拒否しているし Coca-Cola® (1886—) 等一滴も飲んだことはない。] また Levi's® Jeans (1873), Microsoft® の Windows® のように全く新しいものをつくり上げて世界の標準となったものも少ない。デパートへ行けば Tiffany & Co. (1837), Levi Strauss & Co. (1850), L. L. Bean (1912), Eddie Bauer (1920), Coach (1941), Nike (1962), Polo by Ralph Lauren (1967), The Gap (1969), J. Crew (1983), Nautica (1983), Tommy Hilfiger (1984) …等アメリカ製品は多い。

(2) 和製英語, 擬似英語と誤った英語

日本には英語に似て非なるものが氾濫している。そのまま使うと英語として間違いとなるものが多い。和製英語と呼ばれるものがあるがそれらは実際“英語”として通用しないので和製擬似英語と言うべきであろう。Karaoke, Pokémon 等日本で作られ英語として通用する言葉の総称はない。これらこそ本来和製英語と呼ばれるべきものである。[ここに“é”の代わりに Pokemon と“e”を使うと発音がポウクモンになってしまう。]

レストラン, 商店では 9 割以上営業中に Open (形容詞 < The store is open.) を使うのに対して閉店に Close を使う。これは動詞の不定形で間違い。正しくは Closed で他動詞の過去分詞が受動態の動作ではなく受動態の状態を表す形容詞補語として使われる。(< The store is closed.) 因みに開店中には形容詞 Open が使えるため、他動詞 Open を使って The store is opened. とすると店を開ける動作になってしまう。開店時間は AM11~PM10 (正しくは 11AM~10PM)。Pizza の発音はピザ (正しくはピツァ)。JR のパークアンドトレインでは動詞+

名詞で釣り合いが取れていない。(正しくは Park and Ride : 動詞+動詞.) 工学部の学年担任教官制度の Campus Advisor と名付けられたものもはじめ Campus とあるからには Off-Campus Advisor がいるのかと思ってしまった。Advising は Campus で行われるので短く Advisor もしくは Academic Advisor が適当な名称である。

(3) アルファベットの略記 (Acronyms)

さらに悪いことにもともと妙な名称をやたらと略記する。CA と略されて全く何のことか分からなかった。ガソリンスタンド (正しくは Gas Station) は GS, エレベーターは EV, インターチェンジは IC, ワーキンググループは WG, Faculty Development は FD と日本では略記されるがアメリカ国内では使われないものばかりである。“AO 入試” もはじめ何だろうと思った。Admissions Office または Office of Admissions はアメリカならこの大学にでもあるが AO と略されることはまずない。(日本語のインター, オーバー, デパート, スーパー, レジなどは英語では省略されず, 元のまま interchange, overcoat, department store, supermarket, cash register と使われる.)

アルファベットの略記には無理もない理由がある。日本語で使われる仮名には清音 (50: あ, い, う, …), 濁音 (10: が, ぎ, ぐ, …), 半濁音 (5: ぱ, ぴ, ぷ, ぺ, ぽ), 拗音 (36: きゃ, きゅ, …, ぎゃ, ぎゅ, …), 撥音 (1: ん), 促音 (1: っ) と合計 113 もある。重複を除き, 現代仮名遣いに限れば独立なものは 71 文字になる。外国語には清音以外もよく使われ, 発音しにくいし, 表記するとどうしても長くなってしまう。例えば Faculty Development は片仮名ではファカルティ・ディヴェロプメントとなり日本語で使われない文字が 4 つもある。しかもこれを英語と違って stress (これを日本語ではアクセントと訳する) なしで発音すると長くなる。FD の方がずっと短く, 発音もしやすい。ただ問題は省略によってももとの意味が失われてしまうことである。これは事実上単語を記号化, 暗号化したことに相当し, 省略形から元の形を推測することは不可能に近い。つまり元の単語を知らないと意味が全く分からない。さらに悪いことに, ある特殊なグループが作った略語を元になった正式な名称の説明なしで一般向けにしばしば堂々と使うことである。公共の場所でいかにこの種の略語が多く使われているかは憂慮に値する。

例 1: 国立国会図書館 website (<http://www.ndl.go.jp/>) で蔵書を検索しようとするところ “蔵書の検索” → “NDL-OPAC” → “NDL-OPAC 国立国会図書館蔵書検索・申し込みシステム” (<http://opac.ndl.go.jp/>) → “一般資料の検索 / 申し込み” → 検索画面となる。ここで先ず OPAC というアルファベットの略記が最初で次に日本語が来て, 何の説明もないのでどういった正式名称の略か全く分からない。[“蔵書の検索” の代わりに “資料の検索” の選択で初めて “OPAC (オパック) とは, オンライン検索用目録 (Online Public Access Catalog) の略称です。” と出てくるが, Public Access が訳から抜けている。公共機関であるから Public Access という言葉は要らない。内部だけで使う検索システムがあるならそちらの方にその旨 (Limited Access とか For Internal Use Only) を付け加えればよい。] 1960 年代, 汎用大型計算機を導入した銀行が Online という言葉をよく使っていた。いまだき Online とは図書館がそれだけ遅れているということに他ならない。そもそも日本語 “目録検索” だけで十分ではないだろうか。英語版では “Catalog” でよい。大した意味がない元の名称を OPAC と略してもったいをつけると全く

意味不明となる。関係者は果たしてこの言葉が検索にとってあまり望ましくない“opaque”（不透明な、不明瞭な）という言葉によく似ているということに気付かれているのであろうか？

例2： 国立国会図書館の検索画面に書籍検索、著者名検索、件名検索と並んで、（何の説明もなく）NDC検索とあり、偏執狂的にアルファベットの略記が出てくる。これはMelvil Dewey (1851—1931)の著書*A Classification and Subject Index for Cataloguing and Arranging the Books and Pamphlets of a Library* (1876)で創案された十進分類法 (Decimal Classification) を森清という人が1929年に和漢書共用のために改訂した日本十進分類法 (Nippon Decimal Classification) と呼ばれるものの略である。Nipponという語が入っているのでこの名称は英語名ではありえない。こういう図書館学の業界用語 / 専門用語がアルファベットの略された形でwebsiteという公共の場所で説明なくいきなり出てくるのはすごい。

例3： よく香川大学附属図書館から“JOISが使えます。”というような案内が来る。勿論そのアルファベットの正式名称の説明はない。これは科学技術振興事業団 (1996—; 英語名 Japan Science and Technology Corporation) の文献検索システム (1976—) の英語名 JST Online Information System の略である。とにかくアルファベットで略記しないと見栄えがよくないらしい。JSTはJapan Standard Time (日本標準時) 専用にしておいて欲しかった。

例4： 国立情報学研究所 (<http://www.nii.ac.jp/>) が提供する全国の大学図書館等の所蔵する図書、雑誌の総合目録データベース (<http://webcat.nii.ac.jp/>) は“NACSIS Webcat 総合目録データベース WWW 検索サービス”と呼ばれる。勿論NACSISという略称についてはwebsiteのどこにも説明が見当たらない。国立情報学研究所広報調査課に問い合わせると、“NACSISとは、国立情報学研究所 (NII : National Institute of Informatics) の前身である学術情報センター (NACSIS : National Center for Science Information Systems) のことで、サービスの名称として、現在も使用しているものです。”だそうでアルファベットの略称の意味を理解するには機関の旧称まで知っておく必要がある。Narcissusに似ているこの略称に自己陶醉しているらしい。

例5： これらに似たことは報道でも同じで、NHKのニュースでは“IAEA, 国際原子力機関…” “NASA, アメリカ航空宇宙局…” という風に必ずアルファベットで略記された形、次に正式名称の日本語訳の順に併記して読む。ここでも何故省略形を先に出す必要があるのか分からない。アメリカの報道機関のニュースではそれぞれ“International Atomic Energy Agency…” “National Aeronautics and Space Administration…” などと最初に出てきたときには必ず省略しないでいくら長くても正式名称を使う。省略形を使うのは同じニュースの中で二回目以降に出てきた時や、新聞の見出しなどである。

例6： かかってきた電話を取るといきなり“RCNPの何々ですが…”と言われたことがある。大阪大学核物理研究センター (Research Center for Nuclear Physics) の略を知っていることを我々は期待されているらしい。略記らしいアルファベットの組織名、会社名は最近実に多い。郵便物でアルファベットの略記が差出人だと不審物として開封せずに捨てることにしている。

同じ英語の言葉を省略する仕方も英語と日本語では違う。science fiction (1851) は日本語ではSFであるが、英語ではSFよりsci-fi (1955; サイファイと発音する) の方がより多く使われる。helicopter (1887) は日本語ではヘリ、英語ではcopter (1943) と違う (相補的な) 部分が取られ

る。Los Angeles は日本語でロス, 英語で LA; personal computer (1977) は日本語でパソコン, 英語で PC である。

(4) 日本語で使われる英語の動詞と名詞

動詞の名詞的用法: 英語で cart または carrier という運搬道具のことを日本語ではキャリーという。carry は動詞である。

動詞や名詞に“する”をつけて動詞を作る。動詞 install を使ってソフトウェアを“インストールする”という。名詞 installation を使って“インスタレーションする”とは言わない。一方、名詞 image を使って“イメージする”と言うが、動詞 imagine を使って“イマジンする”とは言わない。因みに名詞“イメージ”の動詞“イメージする”は広辞苑第二版(1969), 第二版増補版(1976), 第三版(1983), 第四版(1991)にはなかったが第五版(1998)の用例には載っている。私をはじめ日本にいた頃にはなかった言葉で“イメージしてください”とか“何々をイメージした作品”とか最近やたらと耳につく。“想像する”とか“心に思い浮かべる”とかを使うより言葉のイメージがいいらしい。ここに“海の青さをイメージした作品”等と使うと“モチーフ”の意味さえあるように思われる。この意味はまだ広辞苑には載っていない。名詞“イメージ”自体漠然とした言葉で従って日本では好んでよく使われる。今はやりの「評価」で流行を創りだす役割を担う(これを英語で Trend Setter と言う)大学評価・学位授与機構。その自己評価実施要項には“大学等の自己評価のイメージ”, “機構の評価結果のイメージ”, “自己評価書イメージ”, “評価報告書イメージ”というように多用されている。この場合の“イメージ”には“作成例”または“完成想像図”の意味が込められているように思える。つまり“出来上がるとこーゆー感じ”ということらしい。この意味も広辞苑にはまだ載っていない。

(5) 日本式発音

日本語では二重母音を嫌う。goal area はゴウルエアリアではなくゴールエリア, interchange はインターチェインジではなくインターチェンジ, foundation はファウンディションではなくファンデーションとそれぞれ単母音で発音される。coordinate はもともとコウオーディネイトと特に最初の“coor”は二重母音+母音なのにコーディネートと発音される。このように二重母音のある英単語は日本語に取り入れられるとたいていの場合正しく発音されない。レディー(lady), メジャー(major), コンテナ(container), メンテナンス(maintenance), ラジオ(radio)などでは“エイ”と発音すべき“a”“aj”“ai”を“エ”または“ア”と発音してしまう。またデータ(data), デート(date), レーン(lane)では“a”を“エー”と発音してしまう。一方、レインシューズとrainの二重母音を正しく発音できるがrain coatはあってもrain shoesという言葉は辞書には載っていない。正しくはrubber shoesである。逆に、“青:あお=ao”といった母音の組み合わせの発音は英語にはない。chaosは日本語ではカオスだが英語の発音はケイオスのように“ao”は“エイオ”と発音される。

また普通日本語ではあまり抑揚や強勢がないため外来語も同様に発音される。イベント(event)が一例である。一方、アイデア(idea), ミュージシャン(musician), ボランティア(volunteer)等では(英語と異なった)妙な抑揚や強勢のついた発音が定着している。

英語の単語を片仮名で書くとき余計な促音“っ”が入ることがある。バッター (batter), コットン (cotton), ディヴェロップメント (development), ドット (dot), ミッション (mission), アット (at=@) 等どれも英語の発音では“っ”は要らない。日本語では子音“t”の前に母音が来ると発音しにくいのかよく促音“っ”が入る。at, it, ut, et, ot, それぞれ“跡”“意図”“うとうと”“干支”“音”では“っ”を入れないのに対して、“あっと驚く”“きっと”“ずっと”“えっと”“おっと”などでは“っ”が入る。キッチン (kitchen), ティッシュ (tissue), キャッシュ (cash) 等 itch, iss, ash の発音でも不要な“っ”が入っている。その他の母音+子音の組み合わせでも同様である。

また英語の単語のカタカナ表記で余計な撥音“ン”がよく入る。カンニング (cunning), ランナー (runner), ランニング (running), プランナー (planner), プランニング (planning) 等で英語の発音では“ン”はない。これは英語の“n”に日本語では発音“ン”を充てることによる。もともと run, plan, から runner, planning と英語で“nn”とするのはさもないと発音が runer (ルーナー), planing (プレイニング) となることを避けるためであってつづりが“n”から“nn”に変わっても英語の発音は変化しない。

その代わり、昔コンピューター, サーバーと書いていたものを最近ではコンピュータ, サーバと最後を伸ばさない形でよく見る。Computer の“ter”, server の“ver”はアメリカ英語では巻き舌の“r”を使って長く発音される。

Image, それに似た単語 damage の正しい英語の発音はそれぞれ最初に強勢 (Stress) のある“イミジ”, “ダミジ”である。日本語でイメージと伸ばすのはフランス語 image (イマージュ) の影響であろうか。しかし英語の damage の意味を持つフランス語の単語は違うつづりなので日本語の発音ダメージの説明がつかない。イマージュからの転用かも知れない。それともフランス語 dommage (ダマージュ) からきたのであろうか。

清音一濁音の逆転: News (ニュース) はニュースと英語の濁音が日本語では清音になる。一方, loose (ルース) はルーズ, close-up (クロウズアップ) はクローズアップ, カメラの cable release (リリース) はリリースと英語の清音が日本語では濁音になる。

一方, 英語の同じ単語が複数の意味を持つ場合, 日本語では意味ごとに発音を変える場合がある。酒場のバーも“パールのようなものでこじ開け”のパールも同じ bar であり, アイロン, (ゴルフの) アイアンも同じ iron, (ワイン) グラスもガラス (のコップ) も同じ glass であるし, 野球のストライクも同盟罷業のストライキも同じ strike である。これに類するもので, batter と butter は“a”と“u”の違い以外は同じ発音であるはずなのにバッター, バターと異なった発音をする。日本語では batter の“a”と butter の“u”を発音上区別できないからであろうか。このような傾向は漢字の同音異義語に懲りた反動かも知れない。

(6) 意味の変化

さらに英語の単語が日本語では狭い意味または違った意味に使われることがある。claim (日本語の発音ではクレーム) には賠償請求のように“要求する”という意味はあるがそれから転じたと思われる“苦情を言う”という日本でよく使われる意味はなく, むしろ主張するとか, “luggage claim” (空港などでの荷物受け取り), “The accident claimed lives.” (事故が人命を

奪った.)といった意味でよく使われる。smart はもともと頭がいいという意味で日本語のスマートの意味は英語では thin である。また cunning は狡猾、巧妙という意味で日本語のカンニングの意味はない。試験における不正行為を英語では cheating という。言葉の選び方で不適当なものもよく見かける。工学部の website に工学部開設記念行事の英訳として “In memory of ...” というのがあった。“記念して”と言いたいのだとは分かるが、英語でこの表現を使うのは9割以上“故人を偲んで”と言った意味においてであまりおめでたくなる。

また日本人はやたらと “of” を使って単語をつなげる。日本で発行されている物理学の学術雑誌で Progress of Theoretical Physics というものがある。これは Progress in Theoretical Physics の方がよい。ここに “of” を使うと Theoretical Physics (理論物理学) が独り立ちして勝手に進歩するような印象を受ける。Reports on Progress in Physics (1934-) という英国物理学会が発行する雑誌が現に存在する。

命名の仕方：高画質 TV でハイビジョン (High Vision) と呼ばれるものがあるが “Vision is high.” では何のことか分からない。英語では High Definition TV という。“Definition is high.” (鮮明度が高い) で意味をなす。フリーダイヤル (Free Dial) も “Dial is free.” では意味をなさない。英語では Toll Free Number という。“Toll is free.” (使用料が無料) で意味をなす。

“火事” とか “油断” とか多く和製漢語を作ってきた民族であるから、和製英語もどんどん作られる。和製英語から英語へ直すのが難しいのと同じくらい逆も難しい。キッチンタオルは和製英語でこれを英語では paper towel という。最初これを日本のスーパーに買いに行った時、店員にペーパータオルとか吸湿性のある紙とか言って説明したが通じなかった。トイレトーパー、おむつ、生理用品などの棚の間を歩き来させられた。(スーパーなどでの商品の分類法にはそれぞれ店独特の哲学があって時には分かりにくい。これはアメリカでも同じ。)そして純粋な和製英語：オーダーストップ (last order), エネルギッシュ (energetic), フリーサイズ (one size), フリーダイヤル (toll free number), ノースリーブ (sleeveless), コストダウン (cost reduction), ナイター (night game) などは括弧内の表現を使わないと全く通用しない。このような例を挙げていくときりがないが、日本国内は紛らわしい英語環境であることは確かである。

(7) 単数と複数

「香川大学全学教養教育シラバス」というものがあるが全学教養教育には1科目しかないのかと思ってしまう。syllabus は単数形で複数形は syllabi または syllabuses である。また1ページどころか分厚い職業別電話帳にタウン&ハローページと書いてある。英語では Yellow Pages と言う。

(8) あまり意味のない月並みな表現

良く使われる割に余り意味のない言葉、表現と言うものがある。“情報発信” などその最たるものであろう。官公庁、特に地方公共団体、そして最近は大学などで好んで使われるが今時この言葉を見て感心する人が何人いるであろうか？ これは英語にもある。企業説明などで必ず使われる表現に “innovation”, “commitment to quality” とか “attention to detail” というのがある。それぞれ革新、刷新；品質に対する誓約、高品質追求方針を持つこと；大きな目標を目指

すあまり細部を雑に扱うのではないこと、細部にわたる注意、細部へのこだわり、または細やかな配慮という意味である。これら美辞麗句は今やどの企業でも使うため有り難味がなくなってしまっている。アメリカのある企業が日本語版宣伝ビデオを作る際、翻訳を依頼されたことがある。この種の表現が多く、企業担当者も大した意味のない表現ばかりだが入れない訳にはいけないと言っていた。

(9) あいまいな表現

言葉を使うということは行動の一形態である。“言葉遣い、態度”などと併記されるように何をどう言うか、書くかということはものの考え方、見方、立ち振る舞いと切り離せない。いいかげんな考え方、態度ではまともなことを言ったり書いたりすることはできるはずがない。ここで日本語に特有なあいまいな表現について考えて見たい。

原則として英語では、伝達したい事柄を重要度の順にできるだけ簡潔にはっきりと表現するのが常である。このことは作文をする上で、日本語とはっきり違う。日本へ帰ってきてしばしば気付くのが日本語のあいまいな表現である。一つ例を挙げるといろいろな場所でよく耳にする表現で“…かなと思います。”というのがある。“か”と“な”という二つの助詞の組み合わせたもので、助詞は“…句や文の終止に添って判断の変化を示し、また感情的色彩を与えるものが助詞である。”(広辞苑)と定義される。終助詞“か”のほうは助詞として一般的に“事柄に対する疑問を表現する。また、自己の迷い・惑いをこめた詠嘆の感情を表現する。”(広辞苑第三版)。一方“な”は間投助詞で“文節の切れ目、また文の終止した所に用いて、軽く詠嘆し念を押す気持ちを表す”働きがある(広辞苑第三版)。“かな”の形では広辞苑の第五版(1998)で初めて現れるが、小学館日本国語大辞典第一版(1972)には既に載っていて近世後の用法とある。この用法は昔からあったが1990年代に使用頻度が増えて広辞苑も無視できなくなったということであろう。言葉の説明自体は学研国語大辞典第一版(1978)がもっとも正確で“自問をあらわすと同時に話し手がそれについて不審を抱いて思案をめぐらしているという余情を添えるのに用いる。…「かなあ」の形で用いられることもあるが、この形の時は相手に対する問いかけの力は弱く、話し手の詠嘆が強くこめられる。”とある。念には念を押して“…ではないのではないかなと思います。”などと言った丁寧な使い方もある。いずれにせよ“…かな”を使うと“自分の言っていることは本当かどうか分からない不確かな情報です。”と言っていることに他ならず、詠嘆の意味もあるので何かを主張しているのではなく単に感情を表現しているだけ、つまり独り言に近い表現なのでお聞き流してくださいと言うことに等しい。即ち“自分の言っていることは不確かで、独り言に近いものなので内容に関して責任はとりません。”と言った責任逃れの構えで意見を述べることができ、日本人にとって非常に便利で使い勝手のよい表現方法に他ならない。道理で会議の席などで実によく使われる。この表現を聞くといつも鳥肌が立って“不確かならちゃんと確かめて正確な情報を伝えて欲しい。”とか“公務であるはずの会議の席は独り言など場違いである。”と言いたくなる。ついでに“かな”、“かなあ”と無関係でないのが感動詞“なあ”である。“なあなあ主義”の“なあなあ”が広辞苑に載るのは同じ1990年代の第四版(1991)からであるのは偶然であろうか？少なくとも国語辞典から見る限り責任逃れの日本語は増えつつあるように思える。

以前にはなかったが最近の日本でよく耳にするもう一つの例は、文章の語尾を時々上げて相手

の同意を求めながら話す話し方。全部しゃべった後で否定されないように主張を小出しにして石橋をたたきながら渡る堅実な表現方法である。これも聞くたびにごとに背筋がぞっとする。さらに物事をはっきりと断定せず“…系”と呼んでぼかすのも最近の傾向である。また“…するみたいな…みたいな…”や“…やるとか…とか…”といった列挙することでしか物事を表現できない傾向も同類である。

文章に普通主語がないことによる曖昧さも日本語特有である。分かりきったことを省略するのは資源保護の見地から望ましいことであるが、省略しすぎて意味が分からなくなるのでは元も子もない。“安らかに眠ってください過ちは繰り返させぬから”という詠み人知らずの碑文が広島原爆慰霊碑に刻まれている。ここで過ちを犯したのは誰なのか、その責任は誰にあるのか、誰が繰り返させぬと誓っているのか責任の所在が全く曖昧である。この碑文の英訳が載った英語のパンフレットはあるのだろうか？ 主語を何にしているのか見てみたいものである。

このような日本語に特有なあいまいに表現するための語法は英語表現をする上で大きな障害になっているように思われる。

(10) 文字—アルファベットと漢字

日本語のワープロソフトを使い始めてまだ3年少々である。入力するものがそのまま画面に現れる英語に比べて格段に能率が悪いのでできるだけ使わないようにしている。英語の授業以外でも小テスト、宿題類は全て英語でやっている。日本語ワープロソフトを使って2-3ページ以上文章を書くというのは今回が生まれてはじめてである。なぜ能率が悪いのか？

紀元前3,500年頃メソポタミアでシュメール人が楔形文字を発明した。続いてエジプト人が神聖文字を発明する。アルファベットにも様々ありその起源についても諸説ある。メソポタミア、エジプト間で交易を行っていたフェニキア人にとって両方の文字は複雑で不便であった。そこで紀元前1,700-1,500年頃フェニキア人がアルファベットの1種類を発明し、ギリシャ文字、ラテン文字となって現在に至ったらしい。アルファベットは発明の動機から分かるように便利さを考えたものである。[神聖文字には音節文字の成分もあることにはある。例えば私の名前は𐤀𐤁𐤂𐤃𐤄𐤅𐤆𐤇𐤈𐤉𐤊𐤋𐤌𐤍𐤎𐤏𐤐𐤑𐤒𐤓𐤔𐤕𐤖𐤗𐤘𐤙𐤚𐤛𐤜𐤝𐤞𐤟𐤠𐤡𐤢𐤣𐤤𐤥𐤦𐤧𐤨𐤩𐤪𐤫𐤬𐤭𐤮𐤯𐤰𐤱𐤲𐤳𐤴𐤵𐤶𐤷𐤸𐤹𐤺𐤻𐤼𐤽𐤾𐤿𐥀𐥁𐥂𐥃𐥄𐥅𐥆𐥇𐥈𐥉𐥊𐥋𐥌𐥍𐥎𐥏𐥐𐥑𐥒𐥓𐥔𐥕𐥖𐥗𐥘𐥙𐥚𐥛𐥜𐥝𐥞𐥟𐥠𐥡𐥢𐥣𐥤𐥥𐥦𐥧𐥨𐥩𐥪𐥫𐥬𐥭𐥮𐥯𐥰𐥱𐥲𐥳𐥴𐥵𐥶𐥷𐥸𐥹𐥺𐥻𐥼𐥽𐥾𐥿𐧀𐧁𐧂𐧃𐧄𐧅𐧆𐧇𐧈𐧉𐧊𐧋𐧌𐧍𐧎𐧏𐧐𐧑𐧒𐧓𐧔𐧕𐧖𐧗𐧘𐧙𐧚𐧛𐧜𐧝𐧞𐧟𐧠𐧡𐧢𐧣𐧤𐧥𐧦𐧧𐧨𐧩𐧪𐧫𐧬𐧭𐧮𐧯𐧰𐧱𐧲𐧳𐧴𐧵𐧶𐧷𐧸𐧹𐧺𐧻𐧼𐧽𐧾𐧿𐨀𐨁𐨂𐨃𐨄𐨅𐨆𐨇𐨈𐨉𐨊𐨋𐨌𐨍𐨎𐨏𐨐𐨑𐨒𐨓𐨔𐨕𐨖𐨗𐨘𐨙𐨚𐨛𐨜𐨝𐨞𐨟𐨠𐨡𐨢𐨣𐨤𐨥𐨦𐨧𐨨𐨩𐨪𐨫𐨬𐨭𐨮𐨯𐨰𐨱𐨲𐨳𐨴𐨵𐨶𐨷𐨹𐨺𐨸𐨻𐨼𐨽𐨾𐨿𐩀𐩁𐩂𐩃𐩄𐩅𐩆𐩇𐩈𐩉𐩊𐩋𐩌𐩍𐩎𐩏𐩐𐩑𐩒𐩓𐩔𐩕𐩖𐩗𐩘𐩙𐩚𐩛𐩜𐩝𐩞𐩟𐩠𐩡𐩢𐩣𐩤𐩥𐩦𐩧𐩨𐩩𐩪𐩫𐩬𐩭𐩮𐩯𐩰𐩱𐩲𐩳𐩴𐩵𐩶𐩷𐩸𐩹𐩺𐩻𐩼𐩽𐩾𐩿𐪀𐪁𐪂𐪃𐪄𐪅𐪆𐪇𐪈𐪉𐪊𐪋𐪌𐪍𐪎𐪏𐪐𐪑𐪒𐪓𐪔𐪕𐪖𐪗𐪘𐪙𐪚𐪛𐪜𐪝𐪞𐪟𐪠𐪡𐪢𐪣𐪤𐪥𐪦𐪧𐪨𐪩𐪪𐪫𐪬𐪭𐪮𐪯𐪰𐪱𐪲𐪳𐪴𐪵𐪶𐪷𐪸𐪹𐪺𐪻𐪼𐪽𐪾𐪿𐫀𐫁𐫂𐫃𐫄𐫅𐫆𐫇𐫈𐫉𐫊𐫋𐫌𐫍𐫎𐫏𐫐𐫑𐫒𐫓𐫔𐫕𐫖𐫗𐫘𐫙𐫚𐫛𐫜𐫝𐫞𐫟𐫠𐫡𐫢𐫣𐫤𐫦𐫥𐫧𐫨𐫩𐫪𐫫𐫬𐫭𐫮𐫯𐫰𐫱𐫲𐫳𐫴𐫵𐫶𐫷𐫸𐫹𐫺𐫻𐫼𐫽𐫾𐫿𐬀𐬁𐬂𐬃𐬄𐬅𐬆𐬇𐬈𐬉𐬊𐬋𐬌𐬍𐬎𐬏𐬐𐬑𐬒𐬓𐬔𐬕𐬖𐬗𐬘𐬙𐬚𐬛𐬜𐬝𐬞𐬟𐬠𐬡𐬢𐬣𐬤𐬥𐬦𐬧𐬨𐬩𐬪𐬫𐬬𐬭𐬮𐬯𐬰𐬱𐬲𐬳𐬴𐬵𐬶𐬷𐬸𐬹𐬺𐬻𐬼𐬽𐬾𐬿𐭀𐭁𐭂𐭃𐭄𐭅𐭆𐭇𐭈𐭉𐭊𐭋𐭌𐭍𐭎𐭏𐭐𐭑𐭒𐭓𐭔𐭕𐭖𐭗𐭘𐭙𐭚𐭛𐭜𐭝𐭞𐭟𐭠𐭡𐭢𐭣𐭤𐭥𐭦𐭧𐭨𐭩𐭪𐭫𐭬𐭭𐭮𐭯𐭰𐭱𐭲𐭳𐭴𐭵𐭶𐭷𐭸𐭹𐭺𐭻𐭼𐭽𐭾𐭿𐮀𐮁𐮂𐮃𐮄𐮅𐮆𐮇𐮈𐮉𐮊𐮋𐮌𐮍𐮎𐮏𐮐𐮑𐮒𐮓𐮔𐮕𐮖𐮗𐮘𐮙𐮚𐮛𐮜𐮝𐮞𐮟𐮠𐮡𐮢𐮣𐮤𐮥𐮦𐮧𐮨𐮩𐮪𐮫𐮬𐮭𐮮𐮯𐮰𐮱𐮲𐮳𐮴𐮵𐮶𐮷𐮸𐮹𐮺𐮻𐮼𐮽𐮾𐮿𐯀𐯁𐯂𐯃𐯄𐯅𐯆𐯇𐯈𐯉𐯊𐯋𐯌𐯍𐯎𐯏𐯐𐯑𐯒𐯓𐯔𐯕𐯖𐯗𐯘𐯙𐯚𐯛𐯜𐯝𐯞𐯟𐯠𐯡𐯢𐯣𐯤𐯥𐯦𐯧𐯨𐯩𐯪𐯫𐯬𐯭𐯮𐯯𐯰𐯱𐯲𐯳𐯴𐯵𐯶𐯷𐯸𐯹𐯺𐯻𐯼𐯽𐯾𐯿𐰀𐰁𐰂𐰃𐰄𐰅𐰆𐰇𐰈𐰉𐰊𐰋𐰌𐰍𐰎𐰏𐰐𐰑𐰒𐰓𐰔𐰕𐰖𐰗𐰘𐰙𐰚𐰛𐰜𐰝𐰞𐰟𐰠𐰡𐰢𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿𐱀𐱁𐱂𐱃𐱄𐱅𐱆𐱇𐱈𐱉𐱊𐱋𐱌𐱍𐱎𐱏𐱐𐱑𐱒𐱓𐱔𐱕𐱖𐱗𐱘𐱙𐱚𐱛𐱜𐱝𐱞𐱟𐱠𐱡𐱢𐱣𐱤𐱥𐱦𐱧𐱨𐱩𐱪𐱫𐱬𐱭𐱮𐱯𐱰𐱱𐱲𐱳𐱴𐱵𐱶𐱷𐱸𐱹𐱺𐱻𐱼𐱽𐱾𐱿𐳀𐳁𐳂𐳃𐳄𐳅𐳆𐳇𐳈𐳉𐳊𐳋𐳌𐳍𐳎𐳏𐳐𐳑𐳒𐳓𐳔𐳕𐳖𐳗𐳘𐳙𐳚𐳛𐳜𐳝𐳞𐳟𐳠𐳡𐳢𐳣𐳤𐳥𐳦𐳧𐳨𐳩𐳪𐳫𐳬𐳭𐳮𐳯𐳰𐳱𐳲𐳳𐳴𐳵𐳶𐳷𐳸𐳹𐳺𐳻𐳼𐳽𐳾𐳿𐴀𐴁𐴂𐴃𐴄𐴅𐴆𐴇𐴈𐴉𐴊𐴋𐴌𐴍𐴎𐴏𐴐𐴑𐴒𐴓𐴔𐴕𐴖𐴗𐴘𐴙𐴚𐴛𐴜𐴝𐴞𐴟𐴠𐴡𐴢𐴣𐴤𐴥𐴦𐴧𐴨𐴩𐴪𐴫𐴬𐴭𐴮𐴯𐴰𐴱𐴲𐴳𐴴𐴵𐴶𐴷𐴸𐴹𐴺𐴻𐴼𐴽𐴾𐴿𐵀𐵁𐵂𐵃𐵄𐵅𐵆𐵇𐵈𐵉𐵊𐵋𐵌𐵍𐵎𐵏𐵐𐵑𐵒𐵓𐵔𐵕𐵖𐵗𐵘𐵙𐵚𐵛𐵜𐵝𐵞𐵟𐵠𐵡𐵢𐵣𐵤𐵥𐵦𐵧𐵨𐵩𐵪𐵫𐵬𐵭𐵮𐵯𐵰𐵱𐵲𐵳𐵴𐵵𐵶𐵷𐵸𐵹𐵺𐵻𐵼𐵽𐵾𐵿𐶀𐶁𐶂𐶃𐶄𐶅𐶆𐶇𐶈𐶉𐶊𐶋𐶌𐶍𐶎𐶏𐶐𐶑𐶒𐶓𐶔𐶕𐶖𐶗𐶘𐶙𐶚𐶛𐶜𐶝𐶞𐶟𐶠𐶡𐶢𐶣𐶤𐶥𐶦𐶧𐶨𐶩𐶪𐶫𐶬𐶭𐶮𐶯𐶰𐶱𐶲𐶳𐶴𐶵𐶶𐶷𐶸𐶹𐶺𐶻𐶼𐶽𐶾𐶿𐷀𐷁𐷂𐷃𐷄𐷅𐷆𐷇𐷈𐷉𐷊𐷋𐷌𐷍𐷎𐷏𐷐𐷑𐷒𐷓𐷔𐷕𐷖𐷗𐷘𐷙𐷚𐷛𐷜𐷝𐷞𐷟𐷠𐷡𐷢𐷣𐷤𐷥𐷦𐷧𐷨𐷩𐷪𐷫𐷬𐷭𐷮𐷯𐷰𐷱𐷲𐷳𐷴𐷵𐷶𐷷𐷸𐷹𐷺𐷻𐷼𐷽𐷾𐷿𐸀𐸁𐸂𐸃𐸄𐸅𐸆𐸇𐸈𐸉𐸊𐸋𐸌𐸍𐸎𐸏𐸐𐸑𐸒𐸓𐸔𐸕𐸖𐸗𐸘𐸙𐸚𐸛𐸜𐸝𐸞𐸟𐸠𐸡𐸢𐸣𐸤𐸥𐸦𐸧𐸨𐸩𐸪𐸫𐸬𐸭𐸮𐸯𐸰𐸱𐸲𐸳𐸴𐸵𐸶𐸷𐸸𐸹𐸺𐸻𐸼𐸽𐸾𐸿𐹀𐹁𐹂𐹃𐹄𐹅𐹆𐹇𐹈𐹉𐹊𐹋𐹌𐹍𐹎𐹏𐹐𐹑𐹒𐹓𐹔𐹕𐹖𐹗𐹘𐹙𐹚𐹛𐹜𐹝𐹞𐹟𐹠𐹡𐹢𐹣𐹤𐹥𐹦𐹧𐹨𐹩𐹪𐹫𐹬𐹭𐹮𐹯𐹰𐹱𐹲𐹳𐹴𐹵𐹶𐹷𐹸𐹹𐹺𐹻𐹼𐹽𐹾𐹿𐺀𐺁𐺂𐺃𐺄𐺅𐺆𐺇𐺈𐺉𐺊𐺋𐺌𐺍𐺎𐺏𐺐𐺑𐺒𐺓𐺔𐺕𐺖𐺗𐺘𐺙𐺚𐺛𐺜𐺝𐺞𐺟𐺠𐺡𐺢𐺣𐺤𐺥𐺦𐺧𐺨𐺩𐺪𐺫𐺬𐺭𐺮𐺯𐺰𐺱𐺲𐺳𐺴𐺵𐺶𐺷𐺸𐺹𐺺𐺻𐺼𐺽𐺾𐺿𐻀𐻁𐻂𐻃𐻄𐻅𐻆𐻇𐻈𐻉𐻊𐻋𐻌𐻍𐻎𐻏𐻐𐻑𐻒𐻓𐻔𐻕𐻖𐻗𐻘𐻙𐻚𐻛𐻜𐻝𐻞𐻟𐻠𐻡𐻢𐻣𐻤𐻥𐻦𐻧𐻨𐻩𐻪𐻫𐻬𐻭𐻮𐻯𐻰𐻱𐻲𐻳𐻴𐻵𐻶𐻷𐻸𐻹𐻺𐻻𐻼𐻽𐻾𐻿𐼀𐼁𐼂𐼃𐼄𐼅𐼆𐼇𐼈𐼉𐼊𐼋𐼌𐼍𐼎𐼏𐼐𐼑𐼒𐼓𐼔𐼕𐼖𐼗𐼘𐼙𐼚𐼛𐼜𐼝𐼞𐼟𐼠𐼡𐼢𐼣𐼤𐼥𐼦𐼧𐼨𐼩𐼪𐼫𐼬𐼭𐼮𐼯𐼰𐼱𐼲𐼳𐼴𐼵𐼶𐼷𐼸𐼹𐼺𐼻𐼼𐼽𐼾𐼿𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐾀𐾁𐾃𐾅𐾂𐾄𐾆𐾇𐾈𐾉𐾊𐾋𐾌𐾍𐾎𐾏𐾐𐾑𐾒𐾓𐾔𐾕𐾖𐾗𐾘𐾙𐾚𐾛𐾜𐾝𐾞𐾟𐾠𐾡𐾢𐾣𐾤𐾥𐾦𐾧𐾨𐾩𐾪𐾫𐾬𐾭𐾮𐾯𐾰𐾱𐾲𐾳𐾴𐾵𐾶𐾷𐾸𐾹𐾺𐾻𐾼𐾽𐾾𐾿𐿀𐿁𐿂𐿃𐿄𐿅𐿆𐿇𐿈𐿉𐿊𐿋𐿌𐿍𐿎𐿏𐿐𐿑𐿒𐿓𐿔𐿕𐿖𐿗𐿘𐿙𐿚𐿛𐿜𐿝𐿞𐿟𐿠𐿡𐿢𐿣𐿤𐿥𐿦𐿧𐿨𐿩𐿪𐿫𐿬𐿭𐿮𐿯𐿰𐿱𐿲𐿳𐿴𐿵𐿶𐿷𐿸𐿹𐿺𐿻𐿼𐿽𐿾𐿿]

これに類したことが日本語の文字では起こっていない。紀元前に中国から輸入した漢字をいまだに使いつづけている。中国という大国がただ一つそばにあったことにより、それを受け入れるか受け入れないかの選択しかなかったからだと思われる。奈良時代前後、文字が漢字だけだった頃歴史編纂者たちはいろいろ苦労し工夫している。「古事記」(712)で太安万侶は部分的に漢字を音読みだけを用いた表音文字として使い、「続日本紀」(797)の“宣命書き”でも漢字を小字にして表音的に使っている。8世紀に万葉仮名、9-10世紀に片仮名、平仮名と漢字の部分や漢字の草体から音節文字が発明されたもののその使用は助動詞、助詞などに限られ、名詞、代名詞、形容詞、動詞等の主要品詞の語幹に対して依然漢字の地位は揺るがない。漢字には同音異義語が多くあるため音節文字である仮名だけでは不十分なためであろう。漢字は当用漢字だけでも2,000字近くあるので(正確には1946年に1,850字、1981年以降は1,945字)コミュニケーション手段の言語としての日本語は外国人にとって複雑すぎる。英語のように世界中で使われる

ようになることはないであろう。勿論先に述べたように豊富な感情表現や明確さを避けた表現方法を持つので文学作品には使用価値が十分にあり日本文学は世界の文学の中で独特の位置を占める。しかし日常多く処理する通知、報告書類の内どれだけが日本語の特性を生かし、味読を必要とするものであろうか？ 仮名漢字変換に人生の貴重な時間を費やすことになる。しかし簡単な解決方法はあるようにもなく、英語のワープロを使い続けようと思っている。

一歩譲って表音文字だけを比べてみても、アルファベット 26 文字に対し平仮名は 50 字もある。字数で 2 倍の差というのは大きく、日本語の辞書（国語辞典）を引くときによく感じる。最初の文字の選択に 50 通りあり、次の文字の選択にまた 50 通りあるといった具合で（ここままでアルファベットの 4 倍）、探したい言葉の平仮名表示に至ってから今度は同音異義語の中から選択が必要になる。探したい言葉に行き着くまで英語の辞書に比べて数倍時間を要するようになる。

XIV. あとがき

大きな書店に行くと必ず TOEIC 関係書籍コーナー（正しく英語ではセクション）がある。これら多くの本を前にして自分とは関係ないと思うのはなかなかいい気分である。いまや TOEIC はかなり知られた大規模な英語検定試験となった。受験者数とそのスコアの活用はこれからも増えていくことは確かである。人も受くなる TOEIC といふものを我も受けてみむ、とて、受くなり野次馬根性的な不純な動機でまあとにかく受けてみることにしたのは文字通り正解であった。受験料¥6,615 を払い受験申込書を発送してしまえば受験料がもったいないので受けることになる。ゆっくり準備してからという時間は残念ながらなかった。試験そのものは日曜日の午後 2 時間あまりを使うだけで良い。2 時間の試験中試験室内に拘束はされるが、会議とか委員会とかの雑用から開放されるこの開放感！ 回答していくペースが非常に重要なこの試験は実際に受けてみないことにはどういふものか本当のことはわからないであろう。こうして私が最近一回限り受けた体験をもとに本文を書いた。TOEIC について色々なことを知るのに良い機会になった。

経団連国際文化教育交流財団（石坂財団）第 2 回留学生として初めて渡米して 25 年経った。2 年間の奨学金であったのでまさか足掛け 23 年も滞在することになるとは思わなかった。その間英語環境の中で暮らしてきた。“20 年以上もアメリカで暮らせば英語ができるようになってあたりまえ”と言われるかも知れないがこれは必ずしも正しくない。常に評価にさらされ、業績主義、実力主義の環境の中で生存の手段として英語を使わなければならなかったことが上達する上で大きな要因であったと思うからである。生存競争に生き残らないことには 20 年もはられない。(Selection Effect) 従って英語上達は長期滞在の必要条件であり、必ずしも十分条件ではない。この点例えば文部科学省短期・長期在外研究員制度などで海外の大学へ行くのとは大分違う。その場合期間は短いし（1 年以内を長期とは言えない）、Visitor は組織の外のお客さんで重い義務もなければ競争原理にさらされない安全な身分であるからである。一方、長年アメリカにいてもあまり英語の上達しない人もいる。日本、アメリカどちらにいても英語の訓練のために毎日努力するか否かが上達の度合いを決める大きな要因であるように思う。書いたり話したりする練習にも、専門的内容の中身のあることを書く、中身のあることをしゃべることが大切である。

頻繁に日本とアメリカを行き来していると、朝起きたときに良く考えないと太平洋のどちら側

にいるかよく分からなくなることがある。また道路でいきなり逆行してくる車に驚き、とんでもないドライバーだと先ず思い、いやここは日本(米国)だから相手の方が正しいと後で気が付くことが時々ある。(日本には車がまともに走れる道路がないとばかりいまだに車を買っていない。)日本の人ごみで人にぶつかって“Sorry!”と言ってしまう。Officeでいきなり電話が鳴ると“Hello!”になる。日本人や外国人と話をするとき自動的に日本語か英語か使用言語が選ばれる。どちらの言語で話しているかあるいは話したかは実際のところあまり自覚していない。後で考えた時、あの人は何人であるから確か英語で話したはずだとかいうことになる。第二外国語のドイツ語、第三外国語のフランス語、第四外国語のロシア語、その他滞在先でかじったイタリア語とかデンマーク語とかはあるが、やはり使用頻度において英語に勝るものはない。おもに英語圏ばかりに行くからではあるが、大体世界中どこへいっても英語が使えればかなり便利なことは確かである。国際コミュニケーション言語としての英語の使い勝手は良い。日本語の文献・書物(私は日本語で書かれたものをあまり使わないが)に加えて英語圏の文献・書物が使いこなせるとぐっと世界が広がる。

英語の題材について日本語で書き終わろうとしている。さて浦島太郎の日本語は果たして通じるであろうか?英語で作文をするという生活を長くしてきたので私の日本語もその影響が強く現れているに違いない。私の英語勉強法は本文を書きながら良く考えてみると全くの自己流である。しかも個人個人に負うところが大きい。必要に応じていい教師を探し積極的に学び取ってきた。決して受身になることはなかった。したがって集団を対象とした授業のような場ではあまり役に立ちそうにない。ここに書いたこと全て誰にでも実行でき、役に立つということにはならないと思うが、こういう勉強方法もあるということを何かの参考にしていただければ幸いである。

初稿に丁寧なコメントを下された大学教育開発センター調査研究部長早川茂教授、また激励をいただいた教育学部の藤井昭洋、永尾智諸先生に感謝致します。最後に私の英語を直接、間接的に鍛えてくださった方々の名前を感謝を込めて記します。Mrs. Ramona Mercer, Mr. Donald G. Sanborn, Professor Setsuo Ichimaru, Professor Chris Pethick, Professor David Pines, Professor Walter Kohn, Professor John Clark, Professor Charles Montgomery.

XV. 付録：TOEIC 得点の有意な変化——命題 1—4 の証明

測定標準誤差 (Standard Error of Measurement : SEM) は実際の得点と得点の平均との差として定義される。[4] もっと分かりやすく言えば1回の試験での得点と同じ難易度の試験を無限回受けたときの得点の平均との差として定義される。同じ難易度の試験を無限回受ければ個人の本当の英語力が分かる。しかし実際上それはできない。つまり測定標準誤差とは個人の本当の英語力(膨大な情報量がある)を一回の有限個の問題で推定することから来る誤差である。これを *TOEIC Technical Manual* では信頼度 68.3 % で ± 25 点と推定している。[4] (IV-5 ページ)

これは標準偏差 25 点の Gauss 分布で 1 標準偏差 (1σ) に相当する。即ち、この意味するところは 1 回目の Listening Test の得点を $L1$ としたときこの受験者が持つ本当の Listening の実力は $L1 - 25$ と $L1 + 25$ の間に 68.3 % の確率ではいるということである。信頼度を 95 % ま

で上げるとこの幅は標準偏差の1.96倍(1.96 σ)となり、 $1.96 \times 25 = 49$ となる。つまりこの受験者が持つ本当のListeningの実力は $L1 - 49$ と $L1 + 49$ の間に95%の確率ではいる。さて、2回目のListening Testの得点を $L2$ としよう。 $L2$ も同様な誤差を持って本当の実力での得点からずれている。次に $L1$ と $L2$ との差 $L2 - L1$ を考える。これは1回目と2回目のListening Testの得点変化である。統計学によれば各々誤差を伴った2つの独立な量の差に付随する誤差は各々の量に付随する誤差を二乗したものの和の平方根である。つまり信頼度68.3%の場合 $\sqrt{25 \times 25 + 25 \times 25} = 35.4$ 。これを文献[4](IV-6ページ)では差分標準誤差(Standard Error of the Difference)と呼んでいる。(命題1証明終わり。)[先に指摘したように文献[5](の10ページ)では2回のスコアの比較で差分標準誤差35点(信頼度68.3%の場合)を使うべきところを測定標準誤差25点(信頼度68.3%の場合)を誤って使っている。さらに信頼度の記述がなされていない。]信頼度95%の場合も同様にして $\sqrt{49 \times 49 + 49 \times 49} = 69.3$ 。[4](IV-6ページ)(命題2証明終わり。) Reading Test(1回目と2回目の得点をそれぞれ $R1$, $R2$ とする)に対しても全く同じことが成り立つ。次にListeningとReadingの1回目の合計点 $T1 = L1 + R1$ の誤差は統計学によれば各々誤差を伴った2つの独立な量の和に付随する誤差であるから各々の量に付随する誤差を二乗したものの和の平方根である。Listening SectionとReading Sectionの得点に相関関係があるということはここでは影響しない。測定標準誤差を問題にしているからである。信頼度68.3%で35.4, 信頼度95%で69.3になる。さらに合計点の1回目と2回目との変化 $T2 - T1$ (ここに $T2 = L2 + R2$)は $T1$, $T2$ という誤差を伴った独立な量の差であるから $T2 - T1$ の誤差は信頼度68.3%, 95%で各々 $\sqrt{35.4 \times 35.4 + 35.4 \times 35.4} = 50.1$, $\sqrt{69.3 \times 69.3 + 69.3 \times 69.3} = 98.0$ となる。(命題3, 4証明終わり。)命題3, 4は文献[4]には載っていない。

XVI. 参考文献

[A] TOEIC公式website(<http://www.toEIC.com>)の文献

- [1] *TOEIC User Guide* (22 pages)
- [2] *TOEIC Examinee Handbook* (50 pages)
- [3] *TOEIC Report on Test-Takers Worldwide 1997-98* (26 pages)
- [4] *TOEIC Technical Manual* (43 pages)

[B] TOEIC高得点〔900点以上〕向け関係文献

- [5] 千田潤一編著「TOEICテストスコアアップ体験記」(ジャパンタイムズ, 東京, 1998年) 1,400

1948年生まれ。福島大学経済学部卒。(株)国際コミュニケーションズ コンサルティング事業部長, (株)アイ・シー・シー代表取締役兼任。TOEIC Friends Club カウンセリング・ディレクターとして1998年7月現在でTOEIC説明会, 企業, 大学での英語学習に関する

講演やカウンセリング約 800 回、受講者総数約 3 万人。TOEIC AAA 級、TOEFL 米大学院入学レベル、国連英検特 A 級、通訳案内業国家試験、ビジネス英検 A 級、オックスフォードアルレス上級、商業英語 A 級（一次）、トリニティーカレッジ最上級、通訳技能検定 2 級、実用英語検定 1 級等。TOEIC の一般的な説明、“みんなこうしてスコアをあげた” という 17 人の体験記と編著者の助言集。

- [6] 安達洋「私の TOEIC テスト超スコアアップ法」（中経出版，1998）¥1,200；「入門 TOEIC テスト『超』勉強法」（中経出版，2001）¥1,200

1964 年生まれ。海外留学経験なし。中央大学法学部卒で社員の時 500 点から一年後 740 点、それから数年かかって 1994 年までに 875 点、自己最高点 950 点。現職早稲田大学エクステンションセンター講師、English Trainers' Network チーフトレーナー兼任。

- [7] 吉村達也「たった 3 ヶ月で TOEIC テスト 905 点取った」（ダイヤモンド社，1999）¥1,400

1952 年生まれ。一橋大学商学部卒。推理作家。作家の立場から英語と日本語の比較もある。1 回目 1998 年 7 月 26 日 770 点、2 回目 1998 年 9 月 27 日 905 点。

- [8] 山岡三子「独習 7 ヶ月で TOEIC TEST 905 点」（明日香出版社，2000）¥1,300

1964 年生まれ。宝塚音楽学校卒。現在学習院大学英米文学科在籍中でキャスター。1 回目 1998 年 3 月 22 日 830 点、2 回目 1998 年 5 月 24 日 845 点、3 回目 1998 年 7 月 26 日 905 点。他に国際英検 A 級取得。

- [9] 長谷川剛「TOEIC TEST 鉄人伝説」（マクミランランゲージハウス，2001）¥1,400

1959 年生まれ。筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科単位取得修了。英語教育修士。現在フリーの英語講師。TOEIC 年間制覇（7 回連続満点）に挑戦中。気合を入れるため坊主頭にしたりする TOEIC 受験マニア。1 回目 1999 年 3 月 28 日 960 点、2 回目 1999 年 5 月 16 日 975 点、3 回目 1999 年 9 月 19 日 980 点、4 回目 2000 年 1 月 30 日 985 点、5 回目 2000 年 3 月 26 日 990 点。延べ 1 年間 5 回挑戦で 990 点取得。2001 年 1 月にも再度 990 点取得。

- [10] 石井辰哉「TOEIC TEST 900 点突破対策と問題」（ベレ出版，1999）¥2,200

1969 年生まれ。関西学院大学卒業以来、TOEIC、英検、TOEFL 対策講座講師という英語業界関係者。英国留学中に実質半年間で 500 点強から 900 点まで得点を上げ、自己最高点は 990 点。

- [11] 中川昭，吹上ナオコ；石井隆之（監修）『『とれる！』TOEIC テスト 990—頂点を極めた！超上級者向け—』（マクミランランゲージハウス，2001）¥2,000

- [12] *TOEIC Friends*（国際コミュニケーションズ）¥1,260

CD1 枚付隔月刊の雑誌。TOEIC の模擬問題 400 問が毎号に載っている。

- [13] 小池直己「5 時間で TOEIC テスト 730 点」（宝島新書，2001）¥750

たったの 5 時間それも 1 点約 1 円で取れるので安くお買い得だと思う。

- [14] The Chauncey Group International「TOEIC 公式ガイド&問題集」（財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会，2000）¥2,800

過去に出された問題 400 問が収められている。CD2 枚付。

- [15] The Chauncey Group International 「TOEIC 公式ガイド&問題集」 Vol. 2 (財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, 2002) ¥2,800
Iに引き続き過去に出された問題 432 問が収められている。CD2 枚付。

[C] DICTIONARIES AND STYLE MANUALS

- [16] *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford Univ. Press, Oxford, UK, 1989); <http://www.oed.com>, <http://www.oup-usa.org>.
- [17] *The Concise Oxford Dictionary of Current English*, 10th ed. (Oxford Univ. Press, Oxford, UK, 1999).
- [18] *The New Pocket Oxford Dictionary*, 9th ed. (Oxford Univ. Press, Oxford, UK, 2001).
- [19] *Webster's Third New International Dictionary of the English Language* (Merriam-Webster Inc., Springfield, Massachusetts, 1993).
- [20] *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*, 10th ed. (Merriam-Webster Inc., Springfield, Massachusetts, 1998).
- [21] *The Random House Dictionary of the English Language*, 2nd ed. (Random House, Inc., New York, 1987).
- [22] *The American Heritage Dictionary of the English Language*, 4th ed. (Houghton Mifflin Co., Boston, Massachusetts, 2000).
- [23] *The Chicago Manual of Style*, 14th ed. (The Univ. of Chicago Press, Chicago, Illinois, 1993).
- [24] *Webster's Standard American Style Manual* (Merriam-Webster Inc., Springfield, Massachusetts, 1985).
- [25] W. Strunk Jr. and E. B. White, *The Elements of Style*, 4th ed. (Allyn and Bacon, Boston, Massachusetts, 2000).
- [26] *Random House Webster's English Language Desk Reference*, 2nd ed. (Random House, New York, 1999).
- [27] *The Oxford Greek Dictionary* (Berkley Books, New York, 2000).
- [29] *Chambers Murray Latin-English Dictionary* (Chambers, Edinburgh, UK, 1933).
- [30] *Cassell's Latin and English Dictionary* (Macmillan, New York, 1987).

Disclaimer : ここに書かれていることは著者の体験・意見でありこれらを実行して効果あるとは保証の限りではありません。また、実行する場合は自らの責任において行ってください。実行に伴う様々な身体的、精神的、経済的危険要素並びにその帰結に関して著者は一切責任を負いません。また本文の内容は著者の個人的意見、視点であり、香川大学大学教育開発センター、香川大学、文部科学省、並びに日本国政府のものではありません。

TOEIC® is a registered trademark of Educational Testing Service (ETS). The TOEIC Program is administered by The Chauncey Group International Ltd., a subsidiary of Educational Testing Service. This article is not endorsed or approved by ETS or The Chauncey Group International Ltd. GRE®, Graduate Record Examinations®, Test of English as a Foreign Language™, Test of English for International Communication™ are registered or unregistered trademarks of ETS. SAT® and Scholastic Assessment Tests™ are registered or unregistered trademarks of College Entrance Examination Board.

©2003 Naoki Iwamoto All Rights Reserved.